

与島古墳群

飛騨東部第一地区上切団地農地造成に伴う発掘調査報告書

1997

東海農政局飛騨東部第一開拓建設事業所
財団法人 岐阜県文化財保護センター

序

高山盆地及びその周辺には、原始・古代の遺跡が数多く見つかっております。縄文時代の大集落跡とされる垣内遺跡、弥生時代の墳墓であるツルネ遺跡の方形周溝墓、5世紀代の古墳とされる冬頭王塚、さらに奈良時代の創建とされる国分寺・国分尼寺など枚挙にいとまがありません。

高山市内に確認されている古墳は70数基を数え、特に市内北部で宮川と合流する川上川左岸にはその約半数が存在しています。市内上切町に所在する与島古墳群はそのなかのひとつです。

このたび、飛騨東部第一地区上切団地農地造成に伴い、埋蔵文化財の記録保存を行ふために与島古墳群の発掘調査を実施しました。発掘調査は東海農政局飛騨東部第一開拓建設事業所から岐阜県に委託され、財團法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。

今回の調査では、3基の古墳を発掘調査しました。須恵器・土師器を中心とする遺物の出土などから、この古墳群が古墳時代後期7世紀代のものであることが明らかになりました。また、飛騨地方での後期古墳の本格的発掘調査は初めてであり、石室の形態や古墳の築造方法などが明らかにされ、飛騨地方のこの時期の歴史を知る大きな手がかりを得ることができました。

発掘調査および出土品の整理・報告書の作成にあたりましては、関係諸機関各位の温かいご理解ご協力を賜り感謝申し上げます。また、現地における調査に際しましては、地元の方々の多大なるご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

財團法人岐阜県文化財保護センター

理事長 篠田 幸男

例　　言

1. 本書は岐阜県高山市上切町与島に所在する与島古墳群(G11T00458～G11T00460・G11T08763)の発掘調査報告書である。
2. 本調査は飛騨東部第一地区上切田地農地造成に伴うもので、東海農政局飛騨東部第一開拓建設事業所から岐阜県教育委員会に委託され、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は、平成8年度に実施し、八賀晋三重大大学人文学部教授の指導のもとに伊藤秀雄と上嶋善治が担当した。
4. 本書に記載した遺物の実測は、次の者が行った。
　　田村由美子　伊藤秀雄　上嶋善治
5. 実測図等のトレースは次の者が行った。
　　谷口尚子　田村由美子
6. 遺物の接合・復元は政井美子が行った。
7. 遺物の写真撮影は野村宗作が行った。
8. 本書の執筆は、第2章第1節は清見村立清見小学校教頭岩田修氏に玉稿を賜り、第1章第1節、第2章第2節、第3章第3節は伊藤秀雄が執筆し一部上嶋が加筆した。他は上嶋が執筆した。編集は上嶋が行った。
9. 事前地形測量および空中写真撮影は㈱イビソクに委託して行った。
10. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略・順不同)
　　田中　彰　佐古和枝　渡辺博人　宇野隆夫　岩田　修　牛丸岳彦　玉田忠雄
　　峰　茂夫　高山市教育委員会　上切町史跡保存会　㈱イビソク
11. 発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には、次の方々の参加・協力を得た。
　　古田奈緒子　沢之向　保　白石和代　稻本　嗣　坂谷正道　清水　武　沖本一雄
　　倉本正幸　蔵田利光　渡瀬　保　野中信二　桜木よし子　中塙いさ子　道塙ふじ子
　　谷口尚子　田村由美子
12. 土層および遺物の色調観察は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』(1993)を参照した。
13. 調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例 言

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経緯	2
第2章 遺跡の環境	4
第1節 与島古墳群周辺の地形・地質について	4
第2節 歴史的環境	10
第3章 調査の概要	14
第1節 造構の概要	14
第2節 3号古墳	17
第3節 4号古墳	30
第4節 6号古墳	39
第5節 古墳時代以外の遺物	44
第4章 まとめ	45
第1節 与島古墳群について	45
第2節 飛騨地方の横穴式石室について	46
引用・参考文献	48

図版目次

- 図版1 1. 発掘前の状況 2. 遺跡全景（空中写真） 3. 遺跡全景（南から）
図版2 1. 2号古墳発掘前の状況 2. 2号古墳南トレンチ 3. 2号古墳東トレンチ
図版3 1. 3号古墳発掘前の状況 2. 3号古墳全景（南から） 3. 3号古墳全景（西から）
図版4 1. 3号古墳全景（空中写真） 2. 3号古墳外護列石（東側） 3. 3号古墳北トレンチ
図版5 1. 3号古墳石室奥壁 2. 3号古墳石室東壁 3. 3号古墳羨道西壁
図版6 1. 3号古墳石室玄室 2・3. 3号古墳須恵器出土状況 4. 3号古墳土師器出土状況
図版7 1. 4号古墳発掘前の状況 2. 4号古墳全景（空中写真） 3. 4号古墳全景（南から）
図版8 1. 4号古墳石室西壁 2. 4号古墳石室玄室 3. 4号古墳外護列石（東側）
4. 4号古墳須恵器出土状況
図版9 1. 6号古墳発掘前の状況 2. 6号古墳全景（空中写真） 3. 6号古墳全景（南から）
図版10 1. 6号古墳北トレンチ 2. 6号古墳石室 3. 6号古墳石室東壁
4. 6号古墳石室西壁
図版11 1～10. 3号古墳出土須恵器
図版12 1～7. 3号古墳出土須恵器 8. 3号古墳出土土師器 9. 3号古墳出土耳環
図版13 1～9. 4号古墳出土須恵器
図版14 1～5. 4号古墳出土須恵器 6. 6号古墳出土耳環 7. 4号古墳出土鉄製品
8. 古墳時代以外の遺物

挿図目次

- 第1図 地区設定図 3
第2図 遺跡周辺の地形 4
第3図 古墳付近の地形区分 5
第4図 与島古墳群～赤保木町の地質断面図 7
第5図 遺跡周辺の地質略図 8
第6図 高山市内の占墳分布 12
第7図 2号古墳トレンチ 14
第8図 地形測量図 15
第9図 トレンチ上層図 16
第10図 3号古墳平面図 18
第11図 3号古墳トレンチ 19
第12図 3号古墳立面図 21
第13図 3号古墳石室 23
第14図 3号古墳遺物出土状況 25

第15図	3号古墳出土遺物(1)須恵器・土師器	27
第16図	3号古墳出土遺物(2)耳環	28
第17図	4号古墳平面図	30
第18図	4号古墳立面図	31
第19図	4号古墳トレンチ	32
第20図	4号古墳石室	33
第21図	4号古墳遺物出土状況	34
第22図	4号古墳出土遺物(1)須恵器	35
第23図	4号古墳出土遺物(2)須恵器	36
第24図	4号古墳出土遺物(3)鉄製品	37
第25図	6号古墳平面図	39
第26図	6号古墳トレンチ	40
第27図	6号古墳石室	40
第28図	6号古墳遺物出土状況	41
第29図	6号古墳出土遺物(1)須恵器	42
第30図	6号古墳出土遺物(2)耳環	42
第31図	古墳時代以外の遺物	44
第32図	高山地域の横穴式石室の変遷	47

付表目次

第1表	高山市内の古墳	13
第2表	3号古墳出土土器観察表	29
第3表	4号古墳出土土器観察表	38
第4表	6号古墳出土土器観察表	43

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

与島古墳群の発掘調査は、東海農政局飛騨東部第一開拓建設事業所が実施する国営農地飛騨東部第一地区上切田地農地造成に伴うものである。

上切田地農地造成区域内には遺跡の存在が確認されていた。そのため、高山市教育委員会文化課、岐阜県教育委員会文化課と東海農政局飛騨東部第一開拓建設事業所の間で平成6年度より協議が重ねられた。上切田地農地造成区域には次のような遺跡が確認されていた。以下区域内の遺跡名を列記し各遺跡への対応を記す。

①与島住居跡（縄文時代中期住跡）

高山市の文化財に指定されているため造成区域より除外する。

②よしま古窯跡

岐阜県の文化財に指定されているため造成区域より除外する。

③与島1号古墳

上切町史跡保存会が管理し地元として保存を希望する遺跡である。設計変更等の処置によって造成計画から除外することが可能であるので現状保存する。

④与島2号～4号古墳

近接して3基の古墳がある。造成区域のほぼ中央に位置しているため造成計画から除外することはできない。発掘調査をして記録保存をする。

⑤与島5号古墳

道路拡張工事ならびに上砂採集によって滅失している。

⑥その他の地点で遺跡である可能性のある個所

事前に試掘調査を行い遺跡の有無を確認する。

このような確認事項に基づき、平成7年度には高山市教育委員会の分布調査資料をもとにして何度かの踏査が行われた。さらに、平成7年春には現状桑畠となっている造成区域南東部の緩斜面を高山市教育委員会が試掘調査を行った。その結果発掘調査の必要はないとの回答を得た。

このような調査結果をもとに地元とも十分な協議を重ね、この区域内の発掘調査範囲を限定していく。その結果、④与島2号～4号古墳の3基を発掘調査し①～③の遺跡については現状保存するという結論に達し、平成8年度に岐阜県教育委員会の委託を受けた財團法人岐阜県文化財保護センターが発掘調査することになった。

この間、分布調査・試掘調査はもとより造成区域内の遺跡への対応は高山市教育委員会が主導的に対応された。

なお、発掘調査された与島古墳3・4号古墳および新たに発見された6号古墳の石室の石材は地元の要請もあり、現状保存される与島1号古墳の近くに移動させた。将来復元される可能性も考慮しそれぞれの石材に番号を付け実測図面と対応させた。

第2節 発掘調査の経緯

1996（平成8）年4月下旬までに現場事務所の設営や用具の搬入など発掘調査の準備を行った。現場での作業は4月30日から開始し、5月8日には関係者が集まって調査始め式を行った。以下、週ごとに調査経過を記述する。

第1週（4.30～5.2） 調査地点は伐採後の木や枝が山積していたので、それらの除去から始めた。第3号古墳は埴丘がよくわかるようになったが、4号古墳はかなり破壊されていることが判明した。

第2・3週（5.7～5.17） 3号古墳に3か所トレンチを設定し掘削を始めた。外護列石らしき石組みを検出し、横穴式石室であることが判明した。4号古墳の東側は土木作業等により土が厚く堆積していることが判明し、西側にも埴丘は削られているものの覆土が厚く堆積していた。掘削にあたって南北方向と東西方向にトレンチを設定した。その結果羨道部と思われる石組みを検出した。3号古墳の東の地点にわずかにマウンドがあり、石が散在していた。古墳の可能性があり、東西方向と南北方向にトレンチを設定した。その結果石室の一部を確認し古墳と判断して、「6号古墳」とした。

第4・5週（5.20～5.31） 4号古墳の羨道部の掘り下げを行ったところ、塵が山上した。南側の埴丘裾部では須恵器片が多く出土し、特に甕の同一個体の破片が集中山上する地点があった。6号古墳は石室内を掘り下げた。発掘調査の対象となった3基の古墳の背後の山にも小規模なマウンドが見られるので、トレンチを8本設定した。さらに、火葬場であったと言われている2号古墳の確認調査のため、トレンチを2か所設定した。

第6・7週（6.3～6.14） 3号古墳の石室内に原位置を留めない天井石2個を重機を利用して除去した。埴丘南側の裾部を掘削したところ、須恵器片とともに暗文入りの土師器片が出土した。また、6号古墳の東側の覆土を除去したところ須恵器片が出土した。

第8・9週（6.17～6.28） 3号古墳はほぼ床面に達し、玄室で礎石らしき石の広がりが出てきた。羨道部では、須恵器の壺蓋、壺身、高壺が出土した。4号古墳の南側および6号古墳の東側の掘削を続けた。雨天時を利用して遺物の水洗作業を行った。

第10・11週（7.1～7.12） 3号古墳の羨道部より、玄室の北西部に棺台らしき石が見つかる。3号古墳および4号古墳の外護列石の確認作業を行った。4号古墳の敷石、壁石および6号古墳の敷石の確認作業を進めた。

第12・13週（7.15～7.27） 3号古墳のトレンチの掘り下げを行った。4号古墳の石室周辺の精査を実施。7月22日に空中写真撮影を行い、7月27日に現地説明会を実施した。

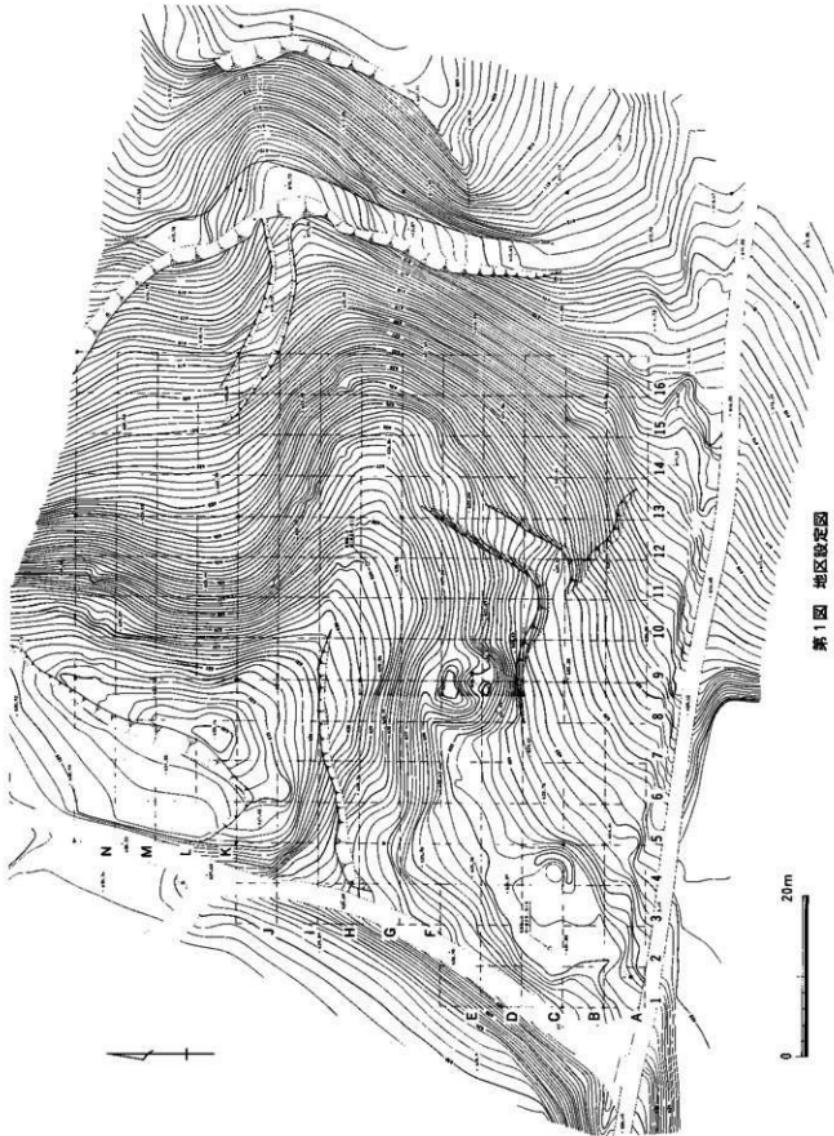
第14・15週（7.29～8.9） 3号古墳のトレンチ掘削および4号古墳の石室周辺精査を行いながら、3号古墳と6号古墳の石室の実測作業に入った。さらに、3号古墳の立面図の作成も開始した。

第16・17週（8.12～8.23） 第16週は夏季休業。3号古墳のトレンチ掘削を続行。3号古墳と4号古墳の立面図作成。6号古墳の石室の実測を続けた。

第18～20週（8.26～9.12） 3号古墳および4号古墳の石室実測。3号古墳のトレンチ掘削後に実測。写真撮影を終えて現場での作業を終了した。

以後、財團法人岐阜県文化財保護センター飛騨出張所にて整理作業に入った。

第1図 地区設定図



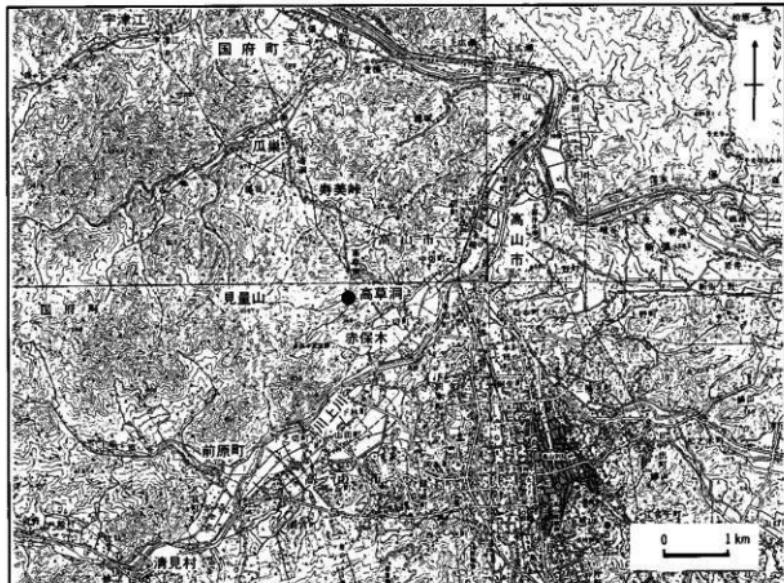
第2章 遺跡の環境

第1節 与島古墳群周辺の地形・地質について

本古墳群の自然環境のうち、地形・地質について調査を行った。野外では、古墳及び周辺の地質を数回にわたって調査をした。採集した岩石、表土は室内にて薄片観察を行った。地形的には、野外での観察に加え、空中写真の判読や地形図からその特徴をつかんだ。以上の作業を行った結果を次に述べていくが、短期間の調査のため不十分なことが多い。そのため、光学の文献を参考にした。文末に記し、明らかにしておきたい。

地形的環境

本古墳群は、高山盆地西端、川上川左岸の山地内の緩斜面地に位置している。第2図には、周辺の地形を示している。高山盆地は、海拔570mほどの飛騨の山間盆地としては大きな平坦地となっている。その西端は、川上川の流域がつくる氾濫原（河岸段丘）と山地が明確に区切られ、それがほぼ北東—南西方向に配列しているに気付く。この北東—南西の方向性は、北側の国府町瓜巣（瓜巣川）にも、同じく宇津江（宇津江川）、糠塚にも見られる。このような方向に、等高線が緩やかな緩斜面

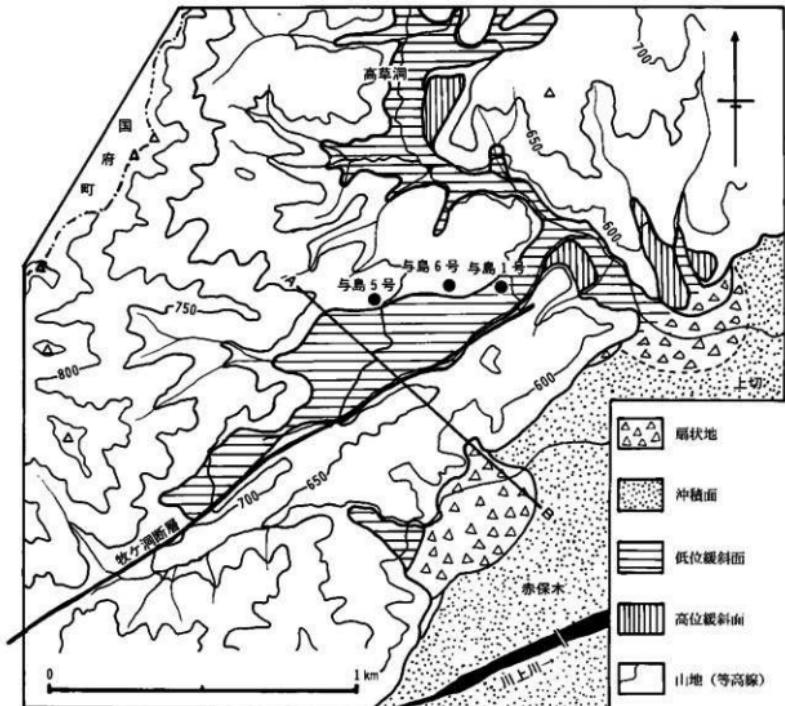


第2図 遺跡周辺の地形（黒丸は遺跡地点）5万分の1地形図（高山・船津・飛騨古川・三日町）より

が谷として多く見られることにも気付くだろう。また、尾根もこの方向に従っているのが多い。この谷の方向は、本古墳群がある与島地区にも見られ、さらに南西方向の前原谷に続いている。高草洞谷はこれと直交する北西—南東方向に延長し、寿美岬から国府町瓜巣に至る。東方には見量山(997m)、南方には赤保木の窯跡を有する緩やかな谷がある。

以上周囲の地形的環境を述べたが、高山盆地西端の山地といつても緩傾斜地形の多い、他地域では見られないやや特異な地域といえるだろう。もう少し本遺跡付近を詳しく見てみよう。第3図は、本遺跡付近の地形区分図である。高草洞谷には、谷底を埋めるように谷底平坦地がよく発達している。この谷の支谷には傾斜のある平坦地(緩斜面)も存在している。また、高位緩斜面が一部残されているのが空中写真から判読できた。高草洞谷はかなり古くから現在のような谷地形を有していたことを伺わせている。この高草洞谷の高山盆地への出口には小規模な扁状地が見られる。同様な扁状地は、赤保木谷の出口にも発達している。高草洞谷の流域の方が赤保木谷より大きいのに、扁状地の発達が悪いのは植生の違いによるか、岩石の風化の違いか興味深い。

与島古墳群のある谷は、平坦地・緩斜面が広く分布している。これは他の支谷と比べて著しい特徴



第3図 古墳付近の地形区分 (A-Bは第4図の断面図の位置)

6 第1節 与島古墳群周辺の地形・地質について

といえる。海拔高度も他より低い。さらに、この支谷の断面図（第4図）をみると、この緩斜面は南側にかなり傾斜している。この特異な谷地形は断層によるものと判断した。「新編日本の活断層」、「三日町図幅」では、この断層は、牧ヶ洞断層と呼ばれている。ここからさらに南西方向へ20km延びる。断層地形が顯著で、高山市前原町の前原谷・清見村牧ヶ洞の県営種畜場などの緩斜面や山尾根の凹地ができるところから、この断層は近年までかなり活発に活動したことが考えられる。地形的には、前原谷支谷において水平方向に右ずれで350m、牧ヶ洞において垂直方向に南東方向が30~50m降起しているとされている。本遺跡付近の断層の位置は、前述の2つの文献では異なっているが、筆者は「新編日本の断層」の方を探った。しかし、この付近には北東~南西方向の谷地形が発達していることから、この方向の断層が多く存在し、それらによる断層破碎帯が風化に弱くて削られやすく、結果として同方向の谷が発達していると考えられる。空中写真でも同方向の直線的地形がよく見られる。与島の谷の堆積物はあまり見られない。砂礫と土壤化した粘土が薄く（1~2m）堆積しているのにすぎない。

第3図では、牧ヶ洞断層を一本の直線で表したが、今述べたように、数本に分散しているかもしれない。その時でも、与島古墳群の谷は、断層地形の発達が最も顕著なので主断層はこの谷を通っていると考える。第4図で明らかなように、与島の谷の緩斜面は南側に極端に傾斜し、谷川も南端を流れている。牧ヶ洞断層による岩石破碎が浸食を容易にし、断層近傍を深く削り、南側が低くなると考えた。さらに、断層の活動によって南東側が隆起することにより、与島の谷と高山盆地の間の山地が残されたのだろう。まさに、断層によって作られた地形である。

与島古墳群は、このような緩斜面の上端と山地地形の境界に作られ、斜面を有効に利用している。この位置は、乗鞍などを見ることができ、日当たりがよく風光明媚な場所であること、水はけがよいこと、運搬・移動がしやすいことなどが挙げられよう。

地質的環境

本遺跡付近の地質略図を第5図に示した。本遺跡は濃飛流紋岩類の分布域に含まれ、高山付近ではその東端近くになる。第5図には濃飛流紋岩類以外は記入していない。高草洞谷の対岸には飛騨外縁帶の変成岩・堆積岩・火成岩、北方の国府町には花崗岩類、高山盆地内には火碎流堆積物など各種の岩石・地層が分布している。しかし、本古墳群に使用された岩石は、濃飛流紋岩類の一種のみであった。そのため、ここでは、濃飛流紋岩類に限って述べることにする。

濃飛流紋岩類は、約8千万年前から5千8百万年前まで、長い期間にわたって断続的に飛騨~美濃地区を中心に岐阜県の半分と同じ面積を厚さ2千mもおおった世界的な大噴火によって生じた。その後、地下の比較的浅い所に花崗斑岩が貫入している。濃飛流紋岩類は活動の時期によって、5つのステージに分けられる。本遺跡付近のものは、ステージIIのものである。およそ6千5百万年前という年代測定がでている。

「三日町図幅」によれば、この付近の濃飛流紋岩は、彦谷溶結凝灰岩と名付けられている。溶結凝灰岩とは、火山噴火により、まだ高温のまま空中や地上を高速で移動した粉流（火碎流・サージ）が堆積した時、高温と圧力のために軽石などがつぶれ、くっついて（溶結して）できた凝灰岩の一種であり濃飛流紋岩類の中でも最も多い種類である。彦谷溶結凝灰岩を主としたステージIIの分布は第5

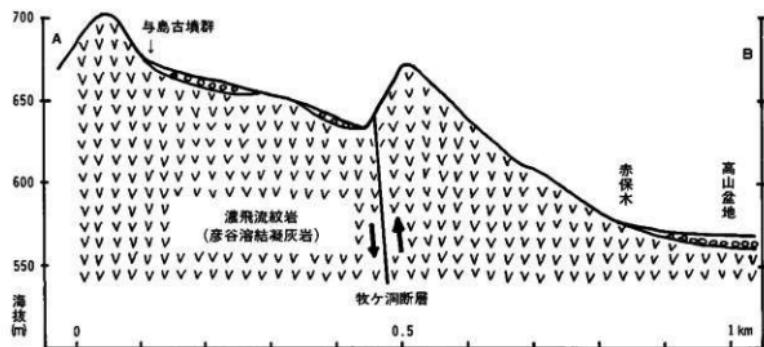


図4 図4 与島古墳群～赤保木町の地質断面図(第3図のA-B面)

図のように広い。彦谷溶結凝灰岩の岩石的特徴は「三日町図幅」の記述によると次の通りである。

「本岩はやや青みを帯びた灰色又は暗灰色で粗粒多斑晶質で、大型の本質レンズを含むことで特徴付けられる。層厚は500m以上と推定される。前原町付近では径3~5mmの石英・斜長石・カリ長石を含む。有色鉱物は角閃石及び輝石類が含まれる。」

与島古墳群付近の岩石、地質について調査した。古墳をつくる岩石は外護列石を含めすべて濃飛流紋岩である。5cmほどのレンズの溶構造が明確なものが多く、溶結流紋岩の種類に分類される。写真1は濃飛流紋岩の近接写真である。3~5mmの石英(円状~不定形)、長石類(長方形)が目立ち大きな斑晶が多く見られる。他の岩石には岩片を含む部分もある。また、角閃石・輝石などの有色鉱物も見られ、彦谷溶結凝灰岩の仲間であることは疑いない。この特徴は周辺の岩石と同じであり、周辺の岩石も同じ種類のものであることが確認された。

それを薄片にして、顕微鏡で観察した(写真2)。有色鉱物として、黒雲母、角閃石、輝石類、不透明鉱物をかなり含み、カリ長石・斜長石・石英の巨晶と微品、ガラス質の部分などが見られる。長石類は一部風化して、粘土鉱物化している。

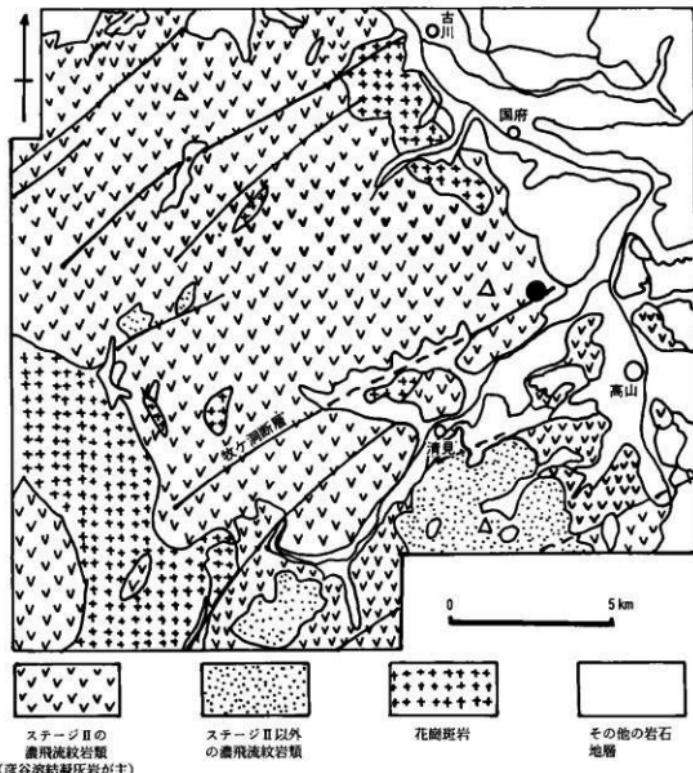
この付近の濃飛流紋岩は風化が進み、表土は濃飛流紋岩の風化による粘土、土壤化が地表かなり深くまで見られる。写真3は、3号古墳すぐ近くの山地を工事によって切り開いた断面であるが、濃飛流紋岩の風化による土壤化が3m以上の深さにわたって進んでいるのを知ることができる。この写真の中央やや下に見られる礫は濃飛流紋岩の風化の残りである。濃飛流紋岩は割れ目などにそって風化が進んでいく、ブロック状に割れた濃飛流紋岩の中心の核にあたる所がこの礫に相当する。円礫によく似た形状であるが、河川で円磨されたものとは異なる。このような円礫状の角が取れた礫は古墳にもよく使われている。濃飛流紋岩は風化により、表面は黄褐色のことが普通である。

これに対して風化があまり進んでいない、割れ目や堆積構造による方向性からブロックに割れたり板状節理発達したりして、角礫状になった濃飛流紋岩もよく見られる。特に板状節理では、文字通り板状、角状の岩石が作られる。写真4は、3号古墳の近くの土壤中から出てきたものであり、このような岩石はたくさん存在している。もちろん人の手の人らない自然石である。このまま古墳の玄室や羨道の壁に利用できるものである。このように、石材は近傍で自由に入手ができた。特に加工しなく

ても適切な石材を選んで、古墳をつくることは可能であった。板状節理の発達したものでは、少し手を入れるだけで厚さの調節はたやすかったと思われる。現在近くに見られる岩石は、数10cmから1m余のものが多い。ところで、鏡石は薄く大きい。これに相当するような岩石は数回の地表調査では見つからなかった。この岩石も彦谷溶結凝灰岩であるので、近傍で入手したに違いない。人工的な加工の跡もあるので、板状節理の発達した岩盤に楔などを入れ、割って作ったなどの様子を想像することができる。

前述のように、彦谷溶結凝灰岩（濃飛流紋岩）は高山西～清見村～国府町などに広く分布しているため古墳に使用された石材の山地決定に決め手はないのだが、すぐ近傍にも石材が確保できる状況なのであえて遠くから運ぶ必要はなかったと考えるのが自然である。ただし、鏡石については、適切な露頭から切り出したことは考えられる。

また、3号古墳のすぐ上の高まりの土壤を採集し、検鏡したが、濃飛流紋岩の風化残留物の石英・



第5図 遺跡周辺の地質略図（濃飛流紋岩類を主とする）（黒丸は遺跡地点）

長石類・輝石類・黒雲母・磁鉄鉱などが見られ、火山灰は発見できなかった。濃飛流紋岩の風化が進んでいることから、地形的にはかなり古い時から現状のままにあったと考えられるが、火山灰は洗い流されたらしい。牧ヶ洞断層の活動がいつ頃起きたかの証拠は地質的にははっきりしない。

この地形的に興味深い所に、多くの古墳群・古窯跡があったことは当時の人々の思い入れを感じることができる。

参考文献

- 河田清雄（1982） 「三日町地域の地質」 5万分の1地質図幅 地質研究所
活断層研究会片（1991）「新編日本の活断層」 東京大学出版会

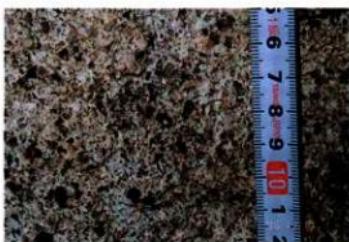


写真1 彦谷溶結凝灰岩（濃飛流紋岩の一種）
3～5mmの円状～不定形の鉱物は石英、白い長柱状の鉱物は長石類、黒い短柱状の鉱物は輝石類、長柱状は角閃石



写真3 濃飛流紋岩の風化と風化残りの円形の巨礫
(ものさしの長さは1m)

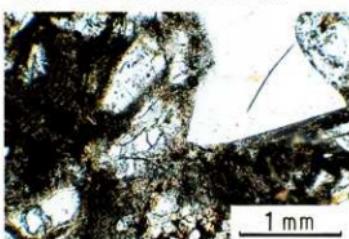


写真2 彦谷溶結凝灰岩の顕微鏡写真

右上の大きな鉱物は石英、長柱状の白色は長石類、黒っぽい部分はガラス



写真4 古墳近傍の表土から掘り出された板状の濃飛流紋岩（自然石）

第2節 歴史的環境

与島古墳群は高山市上切町字与島に所在する。高山市上切町は古くは三枝郷に属し、「和名抄」に飛騨国大野郡三枝（佐以久佐）郷の記述がある（『飛騨後風土記』）。

当古墳群は、高山市北西に位置する見駒山¹⁹南東山麓の南向き斜面を利用して形成され、遠く乗鞍岳を中心に北アルプス連峰を一望することができる。また、北東400mに寿美峠²⁰を越え国府町瓜巣地区に通ずる通称「瓜巣街道」が南北に走っている。この街道は古くは越中街道の近道として利用され現在も国府町と高山市を結ぶ県道谷高山線として利用されている。当古墳群東700mにある隨縁寺の前には「ふだば（札場）」の地名も残されている。

古墳群の周辺には濃飛流紋岩が各所に露出している。「いわがほら（岩ヶ洞）」の地名も残されていることから古墳に使われた石材との関連を推測することができる。また、付近には、縄文時代の住居跡や平安時代の古窯跡3基（よしま1号～3号古窯跡）などの遺跡が点在している。

当古墳の北方500mにある与島A地点遺跡は、縄文時代中期の住居跡で方形炉跡が確認され保存されている。また、石器、石剣、石匙、三頭石斧の他、縄文中期咲畠式の土器も出土している（高山市教委1995a）。

よしま1号古窯跡は、当古墳群の西300m、標高670mの地点に位置する。1956（昭和31）年、林道工事に際して発見された。形態は傾斜地を利用した半地下式の登り窯で、飛騨地方で初めて発見された平安時代後期の灰釉陶器窯跡として注目されている。出土品には、皿や碗の他、馬爪形の陶座も多数出土している（高山市教委1995b）。よしま2号古窯跡は1号古窯の西方80mの山腹傾斜地にある登り窯で、山茶碗・灰釉陶器破片、陶座などが出土している。平安時代初期のものと推定されている。さらに西側200mにはよしま3号古窯があり、2号古窯同様平安時代初期のものと推定される。

また、三枝城の所在する山を挟んだ南側山裾に灰釉陶器片が散布する地域があることなどから、この辺り一帯には他に何基かの窯跡が存在する可能性が高いと思われる。

当古墳群から東へ約400mの地点では水路工事の際に上師器が発見された与島B地点がある。『岐阜県高山市遺跡地図』（台帳編）（1995年）には谷水田の可能性が記されている。

高山市の古墳について（川上川左岸を中心）

高山市内にはおよそ70数基の古墳が確認され、高山市北部で宮川と合流する川上川左岸にはその約半数が所在している。「与島古墳群」はその1群である。ここで高山市に所在する古墳を概観し、川上川左岸に所在する主な古墳群について記す。

高山市の古墳の数は、過去に存在した古墳も含めて78基を数える。現存する古墳の数は49基である。滅失した古墳の数も多いが、未だ確認されていないものもあると思われる。確認されている古墳とその形態や時期については第1表²¹のようである。

川上川左岸には、溝上古墳群、川上川左岸古墳群、寺尾古墳群、与島古墳群、中切上野古墳群がある。溝上古墳は下林地区の山林内山腹に3基発見され全て円墳である。直径10～11m前後でほぼ南に開口している。

川上川左岸古墳群は1～5号古墳まで確認されているが、2～5号古墳は土地改良によって滅失し1号古墳のみが現存する。いずれも横穴式石室の円墳で大きめの石材が使用されている。周辺から板状の石材が産出される事と古墳群の立地との関係を考える上で興味深い。

寺尾古墳群は隨縁寺裏手の尾根上にある。上切町集落からの比高41mで集落を見下ろすことができる場所に所在している。1990（平成1）年の調査では12か所のマウンドが確認されている。東西方向に伸びる尾根に沿って2～3列に連続してマウンドが並んでいる。集落から離れた山腹にあるため盗掘を免れ遺存状態は良いと見られている。高山市内でこれだけの数的規模を持つ古墳群はない。

なお、与島古墳群を南西方向に約900m進むと採草地が開けている。上切平野と呼ばれるこの地域に2基の円墳があったとされる。聞き取り調査によれば箱形組合せ式石棺があったとされている。いずれも草地造成の際に滅失し位置も不明である（高山市教委1995a）。

以上のように高山市の古墳を川上川左岸に所在するものを中心に見てきた。寺尾古墳群以外の古墳群は工事などによって滅失しているものも多いが、寺尾古墳群のような規模をもって存在していた可能性も考えられる。

与島1～6号古墳について

与島古墳群は発掘調査以前には5基の古墳の存在が確認されていた。調査区の東100mには1号古墳がある。1号古墳は第1章第1節で述べたように今回の発掘調査対象とはならず現状保存される。1980（昭和55）年に高山考古学研究会の手で調査がなされ横穴式石室の円墳であることが確認されている（高山考古学研究会1980a・b）。出土遺物は須恵器壺類などである。時代は出土遺物等から7世紀末とされている。墳丘規模は直径約10m、高さ2.5m。石室規模は、玄室長さ3.5m・幅1.4m、羨道の長さ4.0m・幅0.9mである。南東方向に開口する。地元史跡保存会によって周囲に擬木が設置されるなどして保存管理されている。

2号古墳は、調査区内にあり円墳の様相を呈するマウンドが確認されていた。しかしながら本調査によって、昭和30年代まで使用されていた火葬場であることが判明した。

3号ならびに4号古墳は調査区内にあり今回発掘調査された。5号古墳は調査区外に位置していたが道路改修工事によって滅失している。

さらに、今回の調査によって調査区内から新たに6号古墳が発見された。従って当初5基とされていた古墳数は6基とされるところであるが、2号古墳が先に述べたように火葬場であったため、古墳数はこれまで同様5基ということになる。

- 1)「見量山（みはかやま）標高997m」古くは「御墓」または「三墓」と書き表され、「御帝の御墓所」があるという伝承もある。（飛騨国中案内など）
- 2) 地元では幸草洞峠とも高祖（曾）洞峠とも表現する。国府町瓜巣へ通じる道路周辺の洞を高僧洞と呼ぶ。「古代の三枝（佐以久佐）郷→幸草洞→かうそう洞→高祖（曾）洞ではないか」（石原哲彌郷土史講座）
- 3)『岐阜県高山市遺跡地図』（1995年）及び（田中1993）をもとに作成した。

12 第2節 歴史的環境



第6図 高山市内の古墳分布 (1/50,000)

第1表 高山市内の古墳

古墳名	所在地	形状	石室	立地・特徴・出土遺物・時期など
1 中切上野古墳群1～6号	中切町宮ヶ平 中切町上野	円墳		山腹 平成8年度発掘調査された中切上野遺跡に隣接する。山腹南斜面上より1・6・2号と並び東斜面端南より4・3・5号と並ぶ。
2 上切寺尾古墳群1～6号	上切町日焼	円墳		山稜 1～6号の他に12か所近くのマウンドが東西150mの間に並ぶ。高山市に現存する古墳群では最多。
3 与島古墳群1～6号古墳	上切町与島	円墳	横穴式	2号古墳は火葬場 5号古墳滅失 6号古墳新たに発見
4 真言屋敷裏山古墳	赤保木町山崎洞	円墳	横穴式	山腹
5 赤保木ボタ上1～5号古墳	赤保木町ぼた上	円墳	豊穴式?	平地 5号古墳は豊穴式石室(平成4年発掘) 5世紀 江戸時代には9基 明治初7基 現存5基
6 下やせ尾1～2号古墳	赤保木町下やせ尾	円墳		山腹
7 川上川左岸古墳群1号	下林町登立	円墳	横穴式	河畔 山の縁 石室開口 マウンド周囲に石積み 立地に特徴がある。石材との関係が考えられる。
8 溝上古墳群1～3号	下林町溝上	円墳		山腹
9 冬頭王塚古墳	冬頭町68	円墳	豊穴式	平地 昭和45年発掘 豊穴式二段築成石室2 5世紀
10 ねずみ峠古墳	千島町ねずみ峠	円墳	横穴式	山麓
11 岩屋古墳	西之一色町岩屋前	円墳	横穴式	7世紀初頭 両袖式巨石古墳 二段築成
12 千島古墳	千島町	円墳		傾斜地 岩屋古墳の南東
13 小丸山古墳	三福寺町半田 1138	方墳?	豊穴系横口式	丘尾 耳環・刀子・馬具 6世紀前半
14 江名子古墳	江名子町			台地端 石材が一部露出する。
15 杉ヶ洞横穴	松本町杉ヶ洞 2176	横穴		山腹 昭和35年斐太高校郷土研究クラブ発掘 7世紀 須恵器(壺・提瓶・壺)・土師器・玉類・耳環・轡など
16 檜山横穴	三福寺町半田 1138	横穴		1号は昭和3年犬塚行藏らによって発掘 2・3号は昭和63年発見調査 2号から約50体分の人骨・壺・提瓶・鐵鎌・耳環・玉類
17 七切横穴	三福寺町七切 790	横穴		山腹 昭和23年犬塚行藏らによって発掘 瓶・耳付提瓶・壺・耳環・刀子・管玉など 位置については現在不明 7世紀

幸小丸山古墳 昭和63年10月の「飛騨国府シンポジウム」で藤田富士夫氏は方墳で豊穴系横穴式石室という見解を提示した。

岐阜県の横穴について 岐阜県下で横穴が分布しているのは可児市、瑞浪市と高山市の三地域である。
参考文献

高山市教育委員会 1995 『高山市遺跡地図』

高山市教育委員会 1989 『桧山第1～3号横穴発掘調査報告書』

田中 彰 1993 『現存する高山市内の古墳』『斐陀』第3号

第3章 調査の概要

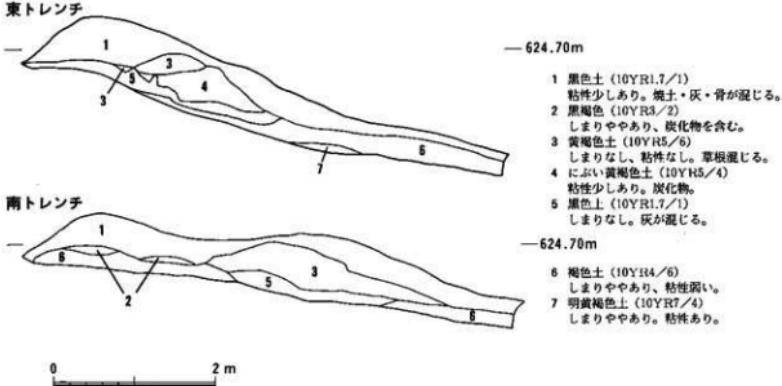
第1節 遺構の概要

発掘調査にあたっての地区の設定は、国土座標に合わせて第1図のように、 $5 \times 5\text{ m}$ の区画を設けた。A列は、国土座標第VII系のX=18270、1列はY=5380となっている。

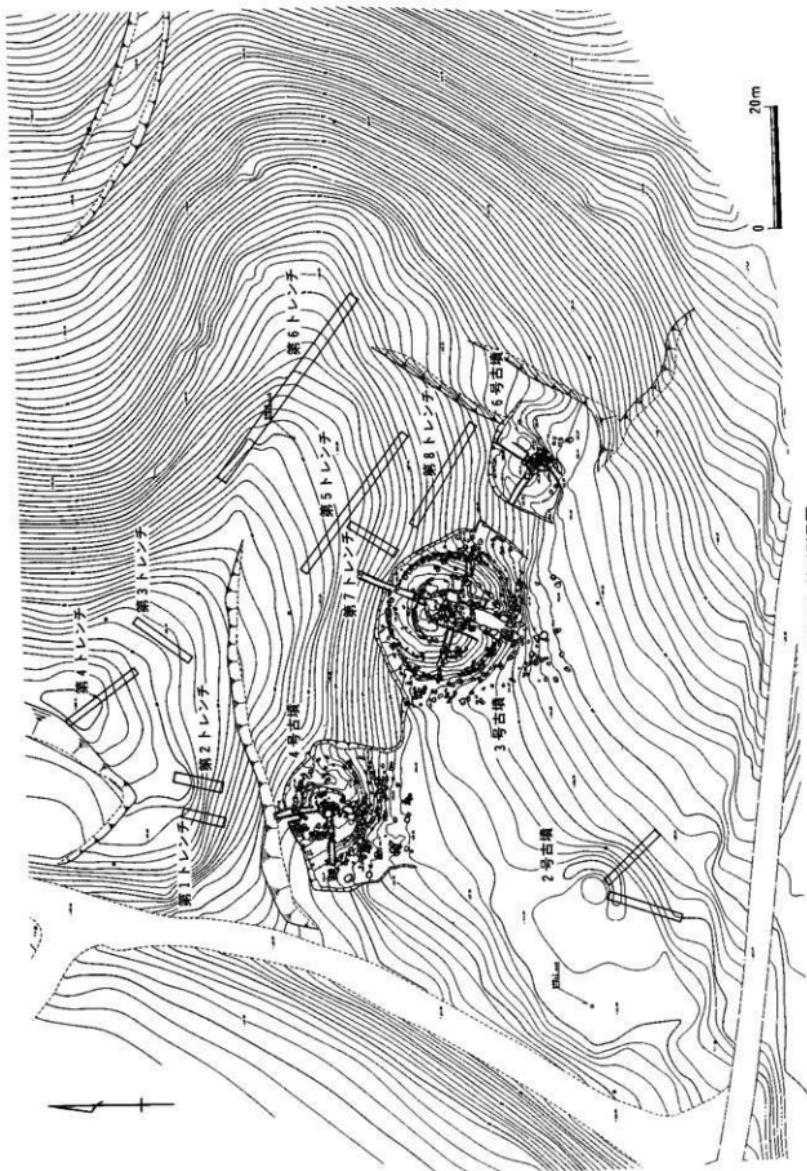
弓島古墳群は、從来1～5号までの5基が知られていたが、1号古墳は上切町史跡保存会により整備され保存されており、5号古墳はほとんど滅失していた。從って今回の発掘調査の対象となったのは、2～4号古墳である。2号古墳は4B区から4C区のあたりに、約1mの高まりが三日月状にあり、中央部は円形に窪んでいた。地元の伝承によると昭和30年代始めまで火葬場として利用されており、古墳のマウンドを利用したものかどうか不明であった。そこで、東側と南側にトレンチを入れ、古墳であるかどうかの調査を行った。トレンチの土層観察により、火葬の際の灰や土を搔きだした結果堆積したものと判断できた(第7図)。從って「2号古墳」は古墳ではないことが判明した。

3号古墳、4号古墳、6号古墳の背後にも小規模ながらマウンド状の高まりが数か所見られたので、トレンチを8か所設定し掘削した(第8図)。その結果、すべて盛土や石室の痕跡は一切なく古墳の可能性はなくなった(第9図)。從って、今回の発掘調査の対象となったのは3号・4号・6号の各古墳である。以下、その調査概要を記す。

1) 高山市教育委員会田中彰氏のご教示による。

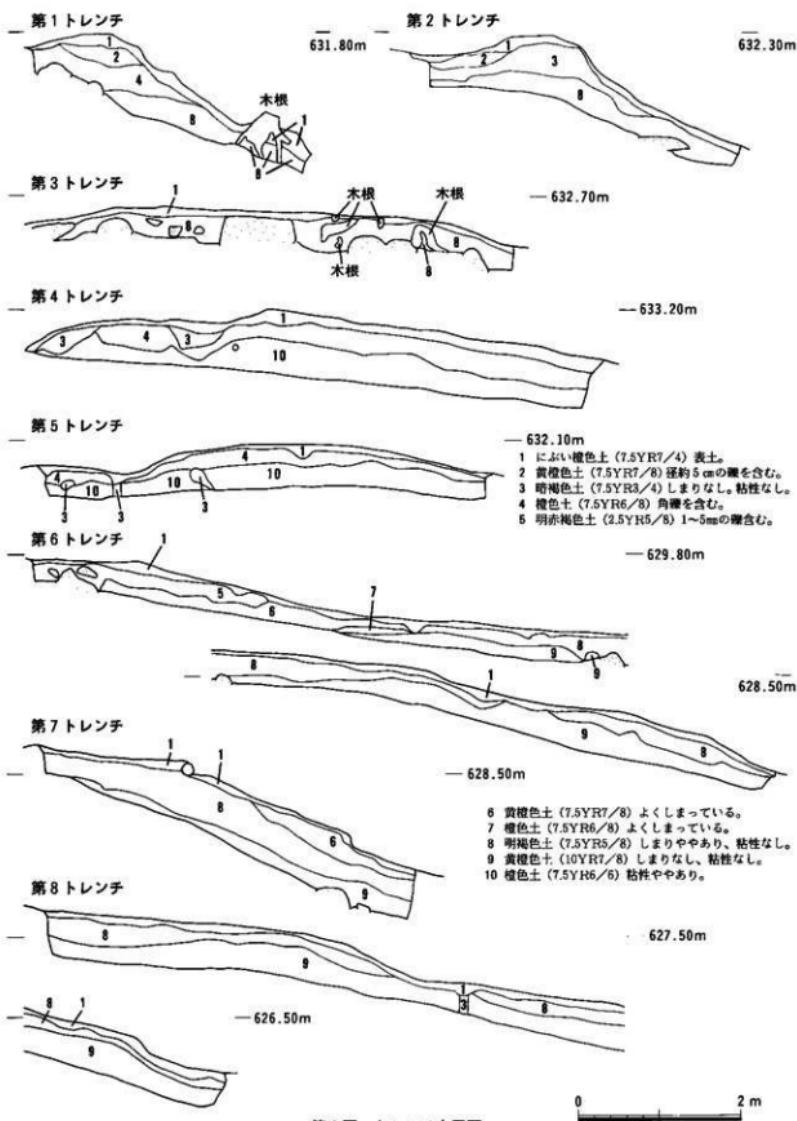


第7図 2号古墳トレンチ



第8図 地形測量図

16 第1節 遺構の概要



第9図 トレーニチ土層図

第2節 3号古墳

調査概況

3号古墳は調査区域のはば中央に位置する。発掘前の段階で直径約12m、高さ約2mの墳丘がはっきりとわかり、石室の天井石の一部と思われる長さ約1.5mの石が1個露出していた。墳頂部は若干窪んでおり、盗掘等により石室が崩壊していることが予想された。墳丘は腐植土に覆われており、見た目では葺石等の配石は顯著には見られなかった。

露出した石から石室の方向を判断し、東・西・北の3方向にトレンチを設定し、表土の確認と石室の確認作業を進めた。そして、表土剥ぎにより2段にわたる外護列石の存在が明らかになり、さらに掘り下げる段階で、両袖式の横穴式石室の存在が確認された。また、南側を中心に墳丘裾部から前面を掘り広げた。その結果、石室出入り口の南東部に須恵器・土師器の集中出土地点があり、土師器には暗文が施されていた。

石室に関しては、天井部が欠失していたが、壁の残存状況は比較的良好であった。崩落による石や土および、埋土を除去して床面まで達した。床はいわゆる疊床で、棺台と思われる2個の石も並んでいた。出入り口付近は壁石の崩落が激しく、閉塞石の存在は不明であった。遺物は、玄室内で須恵器の环2個体分と耳環1点を検出した。羨道部では、須恵器の环蓋・环身・高环を検出した。

なお、外護列石や石室の石材はすべて濃飛流紋岩であり、第2章第1節で述べてあるように、付近で容易に見られる石材である。

墳丘

確認された外護列石の下の段を基底部とすると、プランは円形で、直径は約11mを測る。ただし、南東の墳丘裾部の一部は重機等の通り道となっていて欠失していた。高さは南側で約3.2mである。玄室の天井石は一部しか残っていないくて、しかも落ち込んだ状態だったので、当時の墳丘の高さは不明である。

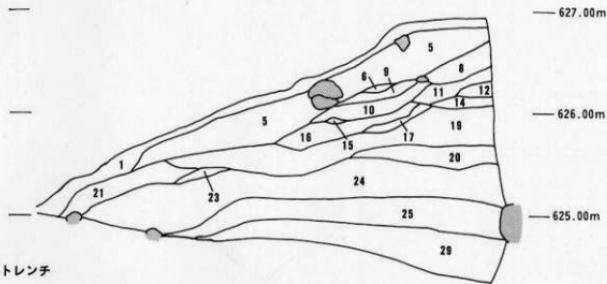
外護列石は、上下2段にわたって築造されている。下段は墳丘の裾を巡って円形に石列が並び、約20~40cmの石が、2~3段組まれている。石は墳丘内面向かって組まれていることから葺石の状況とは異なる。背後に山の斜面を控えているという地形的制約により、南に低く北に高い形状を示している。南側は中央部が低く、北側では中央部が高くなっている。上段の列石は、墳丘に埋め込まれた状況で検出された。上から見るとほぼ円形である。後述する4号古墳の内側の石列のように方形にはならないようである。石の大きさは、約20~30cmで、1~2段組まれている。所々欠失しているのは、崩落のためと思われる。下段と同様の石であるが、一部約80cmの大きめの石もある。南側は一見して3段にも見えるが、最下段は崩落した石であろう。

墳丘の構築状況は、傾斜している地形を利用して、石室の基底部を掘り込んで石室を構築した後、盛土をしている。石室の奥の天井石部分から見て、石室の側壁を構築した段階での埋土と、その後の墳丘を形成する盛土の、大きく2段階の工程が観察される。



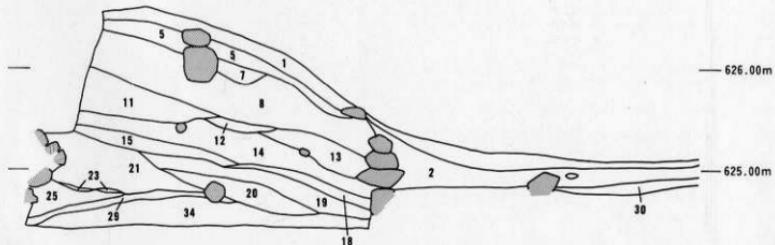
第10図 3号古墳平面図

西トレント

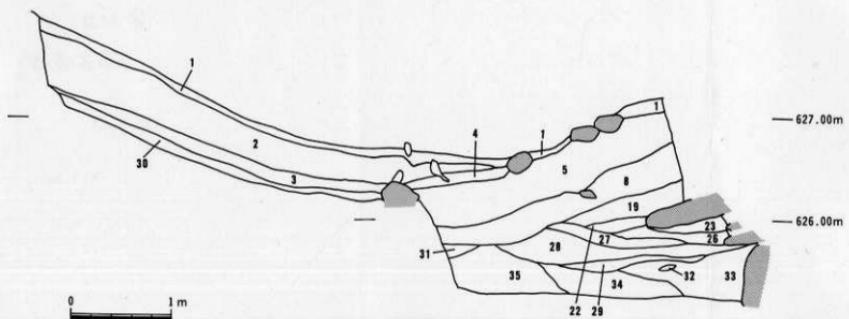


- 1 黒褐色土(7.5YR8/2)表土
- 2 明赤褐色土(7.5YR8/8)
- 3 ぶい繩毛土(7.5YR8/4)
- 4 明褐色土(7.5YR8/6)
- 5 極褐色土(7.5YR4/6)
- 6 黄褐色土(10YR5/8)
- 7 黒褐色土(10YR8/1.5)
- 8 黄褐色土(7.5YR8/6)
- 9 明褐色土(7.5YR8/3.5)
- 10 黄褐色土(10YR5/8)
- 11 明黄褐色土(10YR8/8)
- 12 明褐色土(7.5YR8/4)
- 13 明黄褐色土(10YR8/8)
- 14 明褐色土(7.5YR8/6)
- 15 黄褐色土(7.5YR8/4)
- 16 黑褐色土(7.5YR8/2)
- 17 極褐色土(7.5YR4/4)
- 18 黄褐色土(10YR4/2)
- 19 黄褐色土(10YR8/6)
- 20 極褐色土(7.5YR4/5)
- 21 極褐色土(7.5YR4/5)
- 22 明褐色土(7.5YR8/8)
- 23 明褐色土(7.5YR8/3.5)
- 24 黑褐色土(7.5YR8/2)
- 25 極褐色土(7.5YR4/4)
- 26 明黄褐色土(7.5YR8/8)
- 27 明褐色土(7.5YR8/8)
- 28 明赤褐色土(7.5YR8/7)
- 29 明褐色土(7.5YR8/2)
- 30 極褐色土(7.5YR4/4)
- 31 黑褐色土(10YR8/1.5)
- 32 黑褐色土(7.5YR8/1.5)
- 33 明褐色土(7.5YR8/6)
- 34 明褐色土(7.5YR8/4)
- 35 明黄褐色土(10YR8/6)

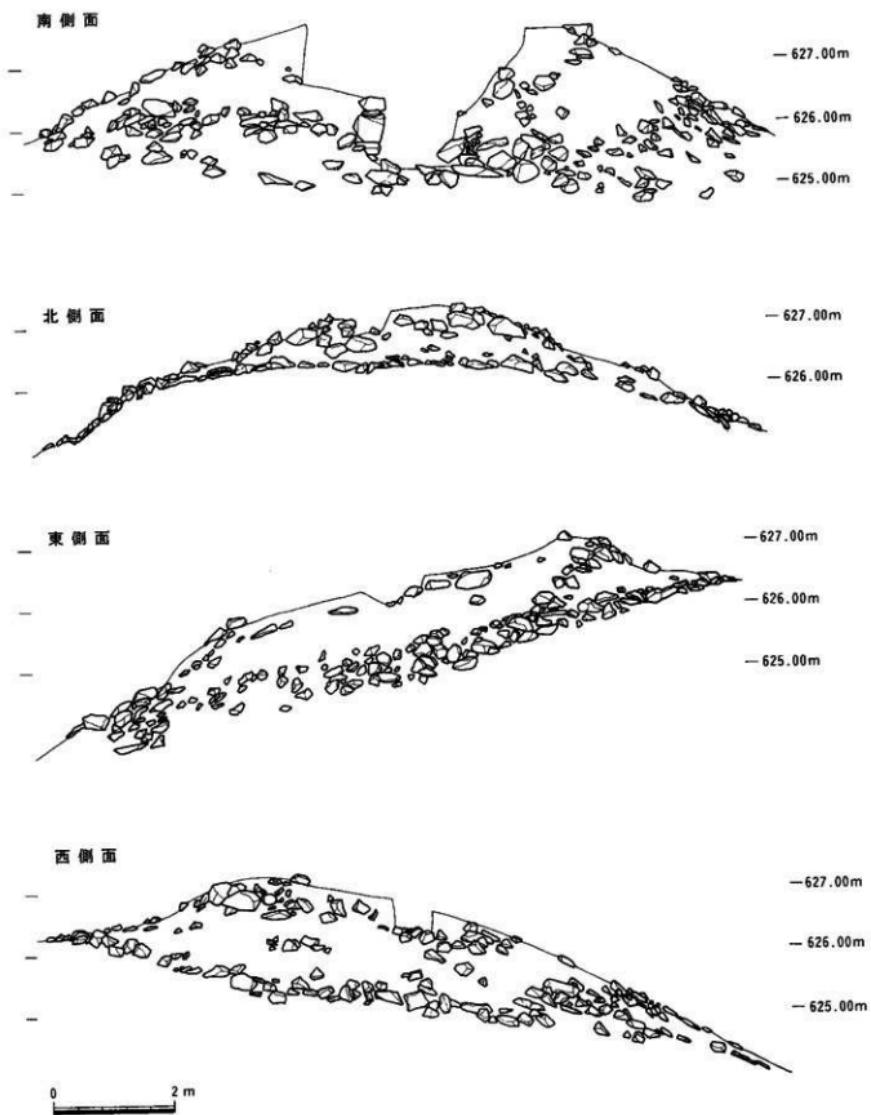
東トレント



北トレント



第11図 3号古墳トレント



第12図 3号古墳立面図

内部主体

南側に開口する両袖式の横穴式石室である。主軸はN-20°-Eである。人井石は、玄門よりやや手前の位置に、長さ約1.5mの石が露出していた。側壁とは、直接つながらなくて原位置を留めていないことが判明したので、重機を利用して除去した。玄室中央部にも1.5×1.2mの偏平な石が見つかったが、側壁に対して落ち込んだ状況であり、明らかに崩落したものであったので、同様に除去した。石室内には、礎石も多く落ち込んでいた。玄室西壁の奥の部分は不安定で内傾しているが、崩壊により傾いている状況であると考えられる。

羨道、玄室とも直線的に構築されている。玄室の長さは、約2.9mで幅は約1.3~1.5mである。高さは、奥壁の上の天井石が残っていたことから、最奥の部分で約1.5mを測る。玄門付近は、高さ約1.0mしか残存していない。羨道部は、長さ約3.0mを測る。ただし出入り口部分は不明瞭である。幅は約1.2mである。高さは現状で、東壁が1.0m、西壁が1.2mである。玄門は、左右に立柱石があり、東側は高さ約1.0mで幅は約20cmであり、玄室側で20cm、羨道側で15cm内側へほぼ直線的に突出している。西側は高さ約0.8mで幅約20cmであり、玄室側で40cm、羨道側で20cm内側へほぼ直線的に突出している。立柱石の上部は崩れていて、いわゆる鴨居石や櫛石の存在は不明である。

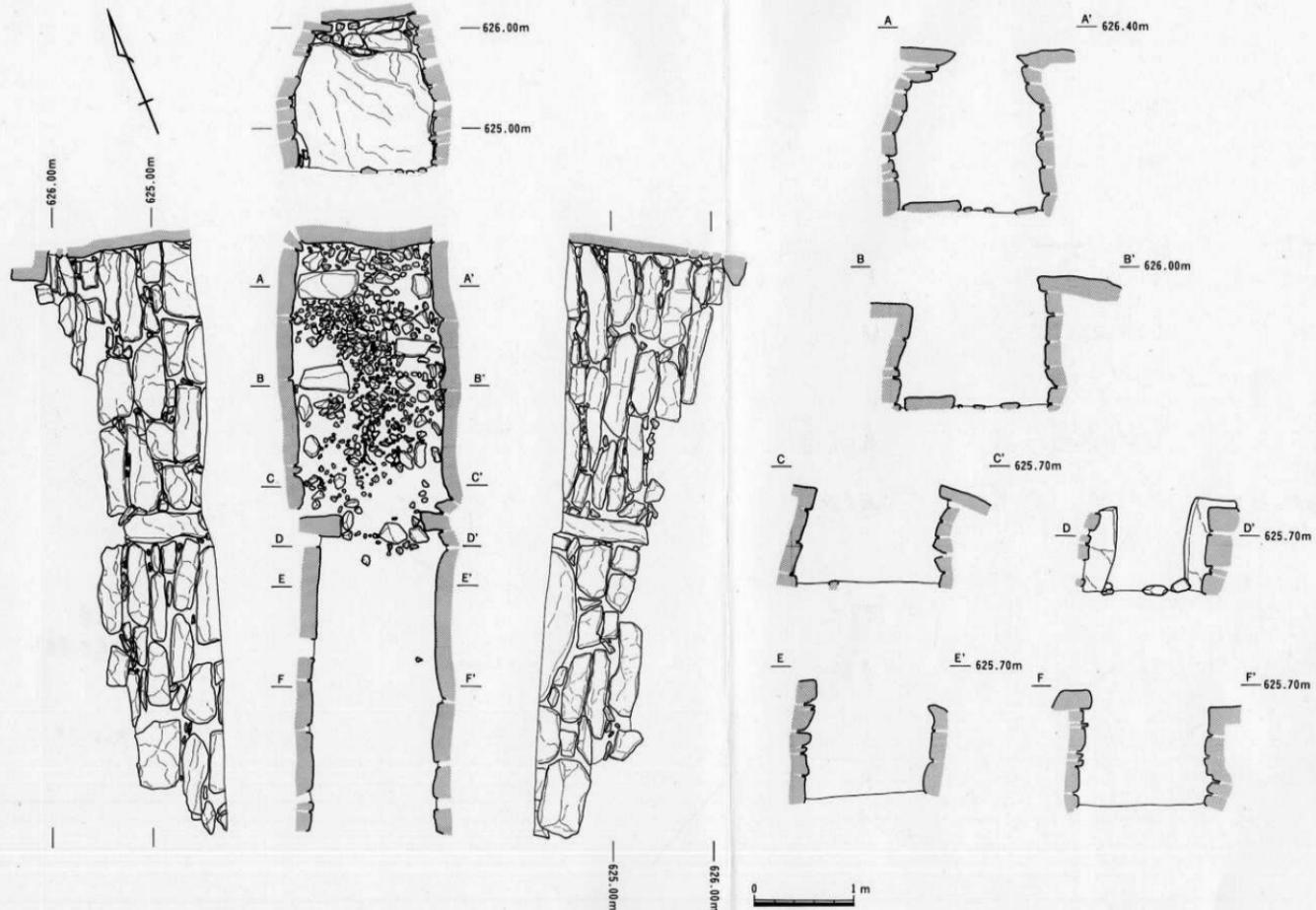
奥壁は、1.2×1.4mの1枚の大きな石を据えその上方天井との間30cmの所に10~50cmの石を重ねている。側壁は偏平な石の小口面を揃えて積み上げてあり、小口面は、縦が20~30cm、横が50~120cmほどの大きさである。最奥部では7段にわたって組まれているが、最上部はやや小さめの石が利用されている。壁は、下から3分の2くらいの高さまでは、ほぼ直立しており、そこから上はやや内傾している。組み方は、1~2段ごとに目地が通っていて、大きめの石の間に小さめの石が埋めるように組まれている。最下段には大きめの石を据えており、最大のものは羨道東壁の石で、長さが約1.5mである。

床面は、拳大から人頭大の大きさの石がほぼ玄室全域に敷いてあった。後述する4号・6号古墳の敷石のような偏平な石は使用されていなかった。玄室北西部に30×60cmの石と20×50cmの石が60~70cmの間隔で平行に並んでいた。いわゆる棺台と考えられる。床面のレベルが羨道部に比べてやや高く、追葬の可能性も考えられたが、断ち割って観察したところ床面の構築は1度と判断した。

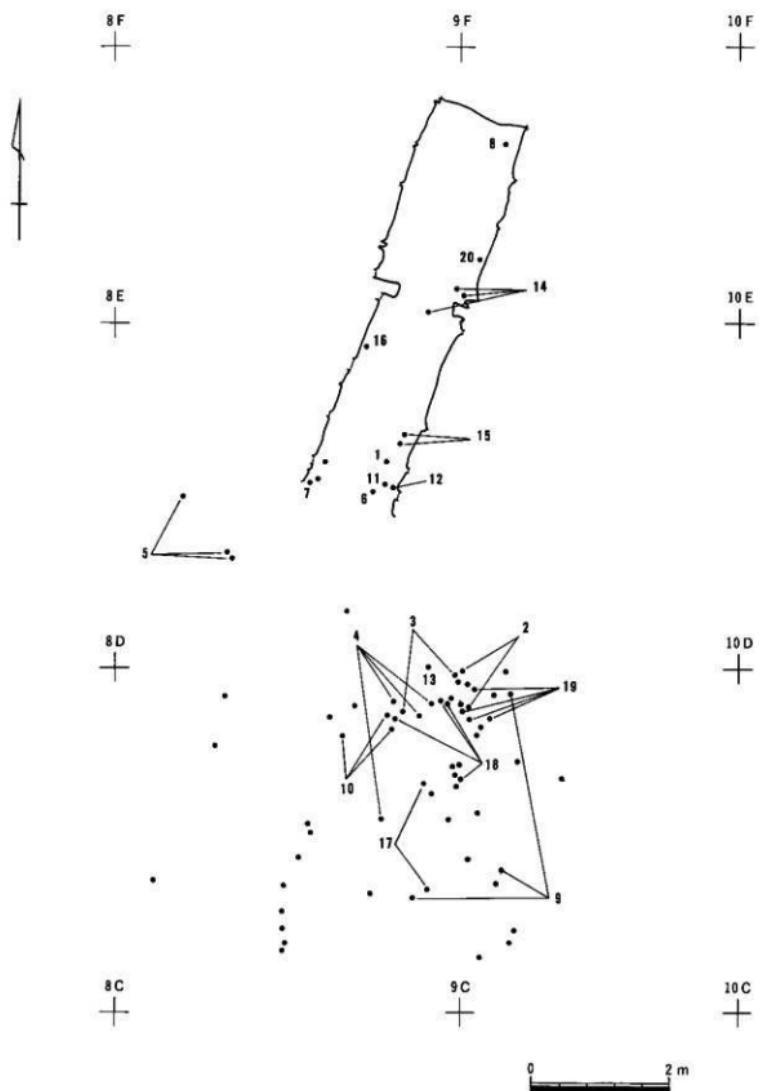
遺物出土状況

玄室にはほとんど遺物が無く、耳環が東壁際の南寄りの地点で1点出土し、須恵器の环身完形品が奥壁付近で1点、南東部に同一個体の須恵器片がわずかにあった程度である。羨道部では、北西部の壁に沿った地点で須恵器高环が1点、南西部と南東部で東壁の下に須恵器环蓋・环身が出土している。

墳丘の裾部では、入り口の南西部で須恵器环蓋が1点出土し、同じく南東部では、やや下りた地点で、須恵器环蓋・环身・高环・土師器环・皿の集中出土地点があった。特に土師器の环および皿には暗文が施されていた点が特筆される。盗掘時に廃棄されたものか墓前祭祀かは確定できないが、後述する4号古墳でも同様の地点に、甕が集中的に山上する地点があることや、暗文入りの土師器が出土していることから、南東部に関しては、墓前祭祀的な用途の可能性が高い。



第13図 3号古墳石室



第14図 3号古墳遺物出土状況

遺物（第15・16図）

石室内および埴丘裾部から出土したものをまとめて記述する。須恵器としては、壺蓋、壺身と高环があり、その他に土師器の壺、皿および耳環が出土している。なお、須恵器の壺類に関する記述・編年等については、（渡辺1996）を主に参考にした。

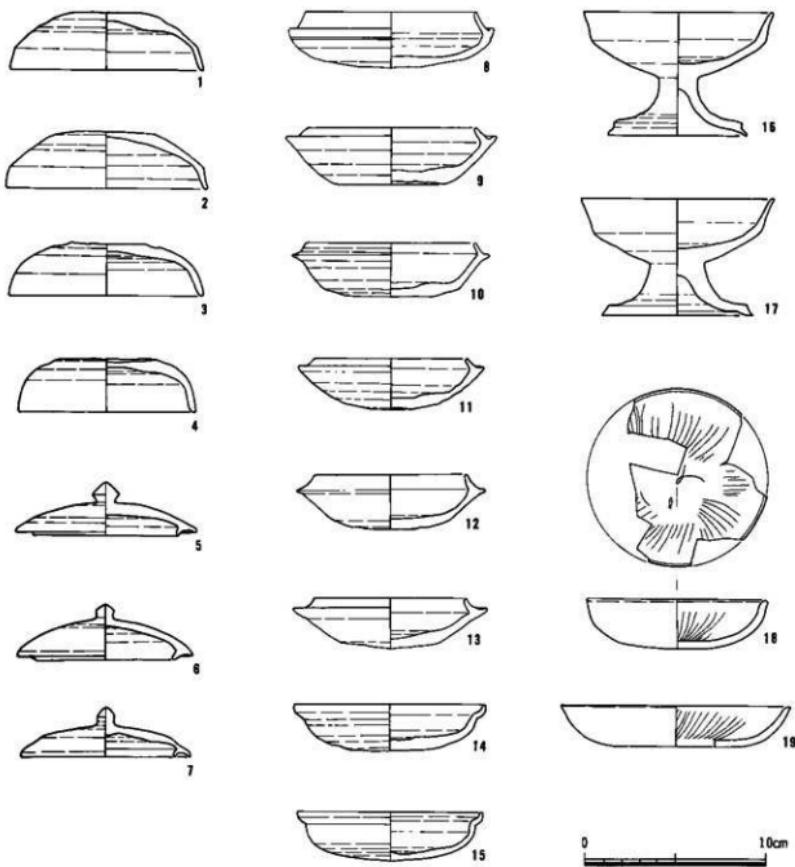
須恵器（第15図1～17）

壺蓋（1～7）

壺蓋に関しては、宝珠つまみを有しかえりの付くものと、そうでないものがある。1は天井部がわずかに丸みをもち、口縁部はやや屈曲して外に開き、端部は丸くおさまる。天井部中央にはヘラ切り痕が残る。内面はナデ調整である。2は、天井部が偏平で、口縁部はやや屈曲して外に開き、端部は丸くおさまる。天井部中央にはヘラ切り痕がわずかに残る。内面はナデ調整である。3は、天井部が偏平で、天井部と口縁部の境を区画するものはない。口縁部はやや開き気味で端部は丸くおさまる。内面はナデ調整である。4は天井部がややへこみ、天井部中央にはヘラ切り痕がわずかに残る。口縁部は直立気味で、端部は丸くおさまる。内面はナデ調整である。1～3は口径が約11.0cmであるのにに対して、4は口径が10.0cmとややこぶりである。両者の間にはやや時期差がある。5～7はつまみがつき、かえりを有する壺蓋である。5には、自然軸が強くかかっており、6、7にもそれぞれ少しずつ自然降灰が見られる。5・6は内面のかえりが口縁端部からわずかに突き出だが、7は、ほとんど内側にとどまる。

壺身（8～15）

壺身に関しては、立ち上がりのあるものと、そうでないものがある。8は、底部が偏平で丸みをもって受部に至る。受部は短く斜め上方に突き出す。口縁部は内傾して立ち上がり部でやや外反し細くそのまま丸くおさまる。受部の下にわずかに沈線が見られる。9は、底部が偏平で直線的に受部に至る。受部は、斜め上方に突き出す。口縁部は内傾し、端部は丸くおさまる。底部外面中央に回転ヘラ切り痕が残る。内面はナデ調整である。10はやや偏平で、あまり丸みなく受部に至る。受部は横に突き出す。口縁部はやや内傾する。底部外面中央に回転ヘラ切り痕がわずかに残る。内面はナデ調整である。11は、底部が偏平でやや丸みをもって受部に至る。受部は短く横に突き出す。口縁部は内傾し、端部は丸くおさまる。内面はナデ調整である。12は底部が偏平で直線的に受部に至る。受部は、横に突き出す。口縁部は内傾し、端部は丸くおさまる。底部外面中央に回転ヘラ切り痕が残る。内面はナデ調整である。13は底部が偏平で直線的に受部に至る。受部は、横に突き出す。口縁部は内傾しながらやや外反し、端部は丸くおさまる。8～10は口径が9.6cmであるのにに対して、11～13は口径が8.6cmである。壺蓋の場合と同様に時期差が認められる。14・15は、立ち上がりがなく、受け口が段を有する。壺蓋の可能性もあるが、壺身と想定した。なお、受部を有しない典型的な壺身は出土しなかった。



第15図 3号古墳出土遺物(1)須恵器・土師器

高坏 (16・17)

羨道部で1点、墳丘外で1点の計2点出土している。16はほぼ完形である。外反気味にやや屈曲して開く口縁で端部は丸くおさめている。脚部は短く大きく開いて裾部に至る。裾部端部は屈曲して外に開いてやや尖る。調整は回転ナデである。17は、外反気味に開く口縁で端部は丸くおさまる。脚部は短く裾部で外に開き、端部は屈曲してやや尖る。脚部は16に比べて太めである。調整は回転ナデである。

土師器（第15図18・19）

18は壺、19は残り具合が悪いが皿であろう。ともに暗文が施されている。18は底部からゆるやかに丸みをもって口縁部に至る。口縁端部は丸くおさまる。底部には螺旋暗文の痕跡がわずかに観察される。体部は斜放射暗文が施されている。19は底部が偏平で、ゆるやかに丸みをもって口縁部に至る。口縁端部の内側がわずかに面取りしている。体部に斜放射暗文が施されているが、底部は不明である。接合できない小破片がまだあったが、3個体にはならないと判断した。

飛騨地方で暗文が施された土師器が出上した例はあまり多くない。吉城郡古川町の上町遺跡C地点5号住居址から暗文入りの壺が2点出土している。平城宮周辺からの搬入品で、平城宮Ⅰに相当する年代が想定されている（河合1989）。吉城郡国府町でもいくつかの遺跡で暗文入りの土師器が出土している。報告例としては半田垣内遺跡があげられる（藤本1993）。桜本遺跡から出土のものは、本古墳のものと似ている¹⁾。また、石橋廃寺の発掘でも出土している²⁾。

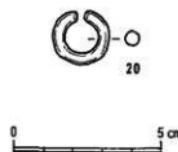
耳環（第16図）

耳環は玄室の南東部で1点出土した。銅芯に金張りを施している。外径2.0cm、内径1.0cm、太さは0.5cmである。緑青による腐食が激しい。断面は円形である。

小結

本古墳は、径約11mの円墳である。背後の山の斜面を利用し、地山を掘り込んで石室を構築し、上下2段の外護列石を有し、両袖式の横穴式石室を構築している。時期に関しては、出土遺物から見てほぼ7世紀中葉と考えられる。ただし、出土した須恵器の环蓋・环身に関しては若干の時期差があり、追葬の可能性も考えられる。後述する4号古墳・6号古墳との時期的な差は微妙な問題であるが、比較的近接した時期に3基の古墳が作られた可能性が高い。3基の中では、墳丘や石室の規模から見て、本古墳が中心的な存在であったと推定することができる。

遺物に関しては、7世紀代の須恵器がまとめて出土しており、飛騨地方の須恵器を研究する上で好資料となる点と、石室出入り口の南東部より暗文入りの土師器が2個体出土している点が注目される。



第16図 3号古墳出土遺物(2)耳環

1) 国府町教育委員会林田敏治氏のご教示による。

2) 八賀晋三重大大学人文学部教授のご教示による。

第2表 3号古墳出土土器観察表

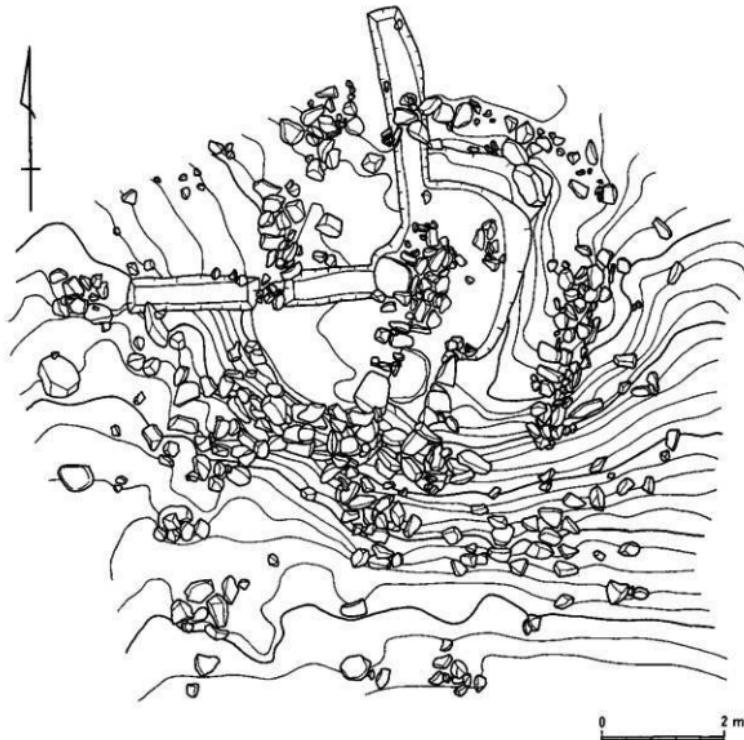
番号	器種	法量			胎土	焼成	色調	遺存	備考
		口径	底径	器高					
1	須恵器 环蓋	11.0	—	3.2	密	良好	灰色(5Y6/1)	完形	内外面とも回転ナデ
2	須恵器 环蓋	11.4	—	3.2	密	良好	灰黄色(2.5Y7/2)	4/5	内外面とも回転ナデ
3	須恵器 环蓋	11.0	—	2.9	密	良好	灰白色(5Y7/1)	1/2	内外面とも回転ナデ
4	須恵器 环蓋	10.0	—	3.0	密	良好	灰黄色(2.5Y6/2)	3/5	天井部ヘラ削り 内外面とも回転ナデ
5	須恵器 环蓋	10.2	—	3.2	密	良好	外)灰オーブ色(5Y5/2) 内)灰色(7.5Y6/1)	3/5	内外面とも回転ナデ 自然降灰
6	須恵器 环蓋	9.9	—	3.1	密	良好	灰白色(2.5Y7/1)	完形	内外面とも回転ナデ
7	須恵器 环蓋	9.6	—	2.8	密	良好	灰色(5Y7/1)	1/3	内外面とも回転ナデ
8	須恵器 环身	9.6	—	3.1	密	良好	オーブ灰色(2.5Y5/1)	ほぼ完形	内外面とも回転ナデ 底部1/2ヘラ削り
9	須恵器 环身	9.6	—	3.2	密	良好	灰黄色(2.5Y6/2)	4/5	内外面とも回転ナデ 底部1/2ヘラ削り
10	須恵器 环身	9.6	—	3.0	密	良好	灰黄色(2.5Y7/2)	4/5	内外面とも回転ナデ 底部1/2ヘラ削り
11	須恵器 环身	8.6	—	2.9	密	良好	灰色(10Y5/1)	完形	内外面とも回転ナデ
12	須恵器 环身	8.6	—	3.1	密	良好	灰色(5Y6/1)	1/3	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ削り
13	須恵器 环身	8.6	—	2.8	密	良好	灰オーブ色(5Y6/2)	9/10	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ削り
14	須恵器 环身	10.8	—	2.6	密	良好	灰色(7.5Y5/1)	5/6	内外面とも回転ナデ
15	須恵器 环身	10.4	—	2.7	密	良好	灰色(N5/)	2/3	内外面とも回転ナデ
16	須恵器 高环	10.5	7.6	6.9	密	良好	灰色(5Y6/1)	ほぼ完形	内外面とも回転ナデ
17	須恵器 高环	10.7	8.4	6.7	密	良好	黄灰色(2.5Y6/1)	口縁部1/2 底部ほぼ完形	内外面とも回転ナデ
18	土師器 环	10.0	—	2.7	密	良好	橙色(5YR6/8)	4/5	内外面とも回転ナデ 暗文
19	土師器 皿	12.8	7.0	2.3	密	良好	橙色(5YR6/8)	1/3	内外面とも回転ナデ 暗文

第3節 4号古墳

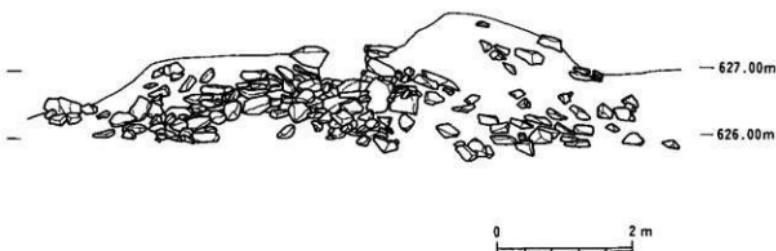
調査概況

4号古墳は調査区域の西、3号古墳から約10mの所に位置する。発掘前の段階では墳丘がわずかに確認された。また周辺には石材が露出していた。墳頂部と推定された部分は窪んでおり盗掘などによって石室が崩壊していることが予想された。

地形や3号古墳の石室方向などから判断して墳丘に対して東西、南北2方向からトレンチを設定し、表土の確認と石室の確認作業を進めた。表土剥ぎにより墳丘前面から外護列石と思われる石組みが検出された。石室の確認作業において羨道部は比較的簡単に確認することができたが、玄室は天井石や側壁などが確認できず床面まで掘り、ようやく玄室の様相が明らかになった。石室西側に玄門立柱が



第17図 4号古墳平面図



第18図 4号古墳立面図

残り、対面には玄門立柱が存在したと推定できるプランが確認できしたことなどから、3号古墳同様両袖式の横穴式石室であると判断した。また、埴丘の南東裾部からは須恵器の甕の破片がまとまって出土し、羨道東壁付近からは台付きの甕が出土した。さらに、埴丘南西裾部からは須恵器壺形の破片が出土し、羨道部への崩落土中より釘などの鉄製品などが検出された。

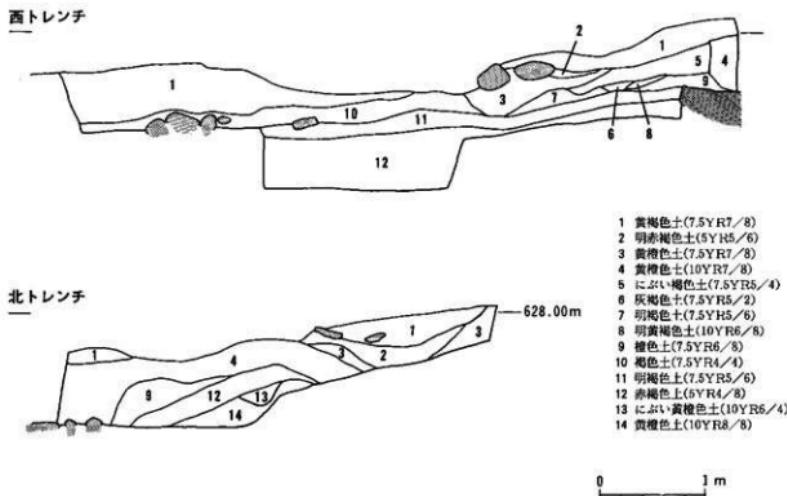
石室に関しては、すでに述べたように羨道部の遺存状態が比較的良好であったほかは、天井石は抜き取られており玄室側壁もほとんどない状態であった。玄室床は約半分に石が敷かれていたが、残り半分には石は敷かれていなかった。羨道部には90×60cmの平板な石が1枚敷かれていた。出入り口部付近の閉塞石の存在は明瞭ではないが板状の石が2枚入口を塞ぐように出土していることからこれが閉塞石である可能性もある。なお、使われている石は3号古墳同様すべて濃飛流紋岩であり、付近で容易に見られる石材である。

埴丘

埴丘後部の遺存が悪いため前面の形から類推するとほぼ円形のプランを呈し、直径約8.0mを測る。高さは現況で約2.0mである。天井石等抜き取られた状態であり最近の工事等によってかなり搅乱をうけたため当時の高さは不明である。

外護列石については3号古墳のように明瞭に埴丘表面を巡るものはない。しかし、円形の埴丘内部にはほぼ方形になる石組みが存在した。石組みの一辺は約5.0mである。これは、通称「埋め殺しの外護列石」と呼ばれるもので、古墳を構築する際の土止め的な役割を持つものであると推測される。また、埴丘全面からその裾部にかけて転落したと思われる石が多いことから埴丘前部を意識した葺石が存在したのかもしれない。

埴丘の構築状況は、山腹の傾斜面を利用し石室の基底部を掘り込み石室を構築した後、前述のように方形の石組で土止めをしながら埴丘を構築する手法をとっているようである。最後の仕上げとして埴丘を円形に仕上げ、前面に意識的に葺石を施したことが考えられる。4号古墳は斜面の端に構築されたため古墳に向かって右側は自然地形を利用している。自然地形を巧みに利用している様子は東西方向トレンチの土層観察によって窺うことができる。



第19図 4号古墳トレンチ

内部主体

南側に開口する両袖式の横穴石室である。主軸はN-24°-Eである。天井石はほとんど残存しなかった。

側壁も最下部の基底石1個のみが残り玄室右側の側壁は全く残っていないかった。ただし、右側壁を構築した際のものと思われる掘り込みのプランは検出できたためそれをもとに玄室規模を推定した。それによると玄室の幅は約1.2mで長さは約2.2mである。また、一部石室の北東に天井石と思われるものが遺存していたのでそれから高さを推測すると約1.2mであるが、不明な部分が多い。

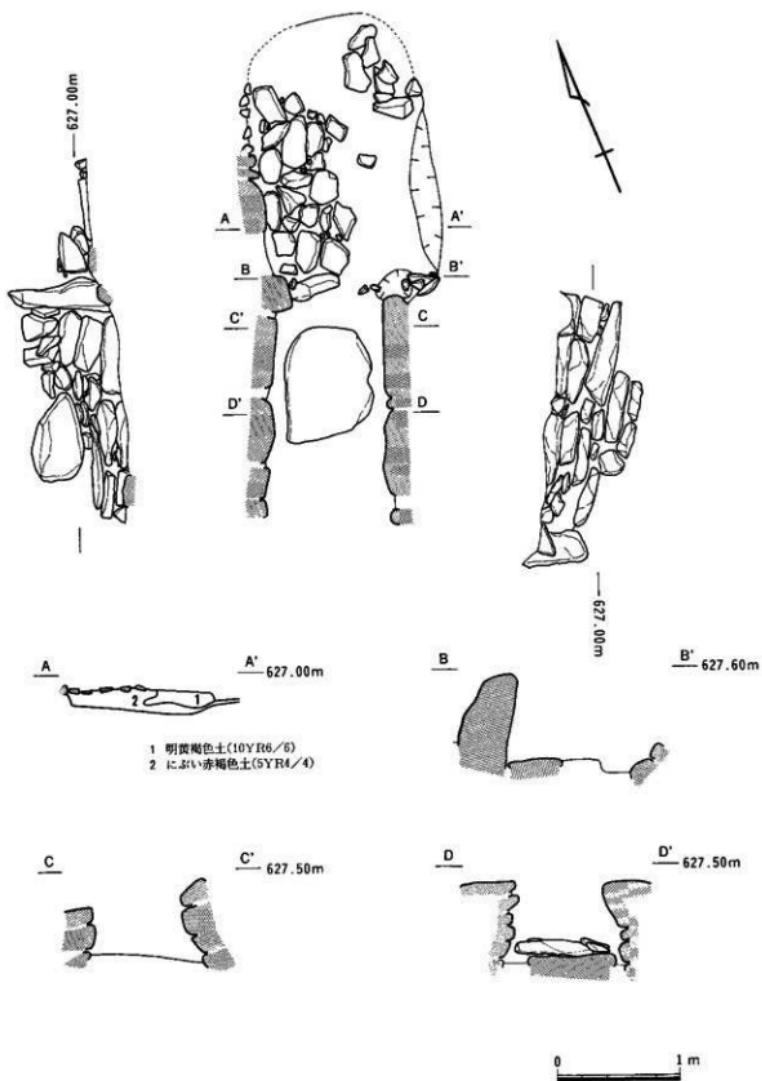
羨道は比較的遺存状態は良好であった。長さ1.8m、幅0.9m、高さ0.8mである。出入り口には閉塞石として使用した可能性のある石組みが見受けられ、羨道内には90×60cmの偏平な板状の石が敷かれていた。玄門は左側に立柱石が残る。右側には立柱石が存在したことを裏付けるプランと立柱石を支えたと考えられる根石が見られた。立柱石上部は崩れしており、いわゆる鴨居石や櫛石の存在は不明である。

玄室床面は、一部に直径約20cm大の偏平な石が敷かれていたが他は堅く締まった床面であった。敷石が全面に施されていたとは考えにくく棺を置く部分だけに石を敷いたと考えたほうが自然であると思われる。

遺物出土状況

玄室内での遺物の出土は少ない。羨道部で検出された甕の破片が3点出土しているのみである。遺物は羨道部および埴丘、埴丘裾部から主に出土している。

羨道では甕がほぼ完形の状態で右側壁付近の床面直上から出土している。また、須恵器壺が同様に

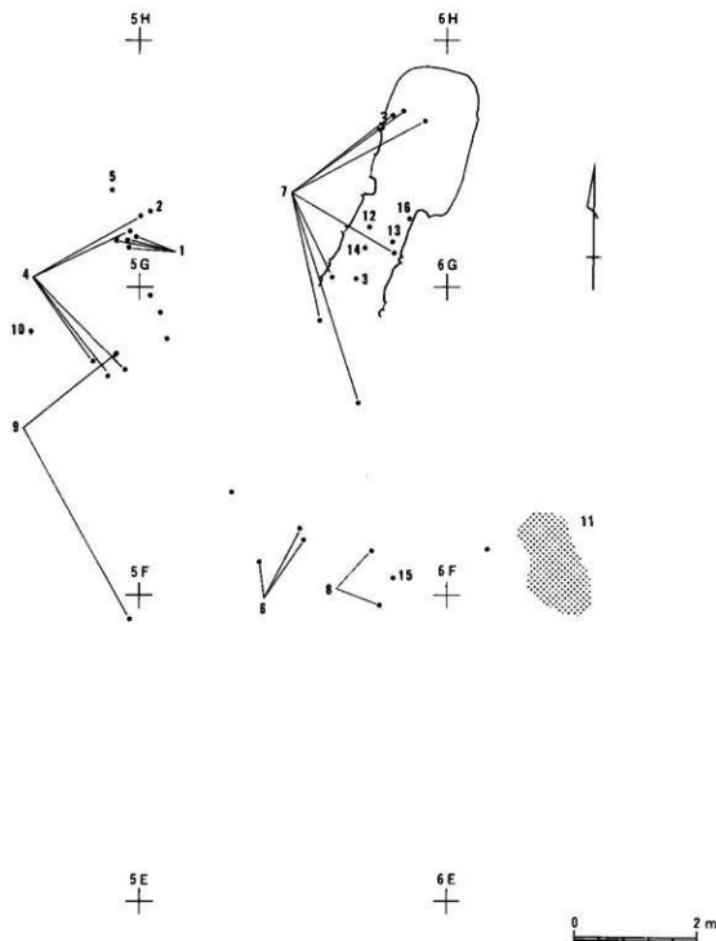


第20図 4号古墳石室

床面直上から出土し、崩落した土中より刀子・刀の一部、釘などの金属製品が出土している。

墳丘および裾部では須恵器が出土している。南西裾部では环蓋2点と环身が2点、須恵器壺の破片が出土している。墳丘全面の裾部では平瓶の口縁部が1個体分、高环が1点出土している。

また、南東裾部には須恵器壺の破片がまとまって出土した地点がある（第21図網かけ部）。胴部直径54cmの大壺であり、墓前祭祀的な用途の可能性が考えられる。



第21図 4号古墳遺物出土状況

遺物

石室内および墳丘裾部から出土したものをまとめて記述する。須恵器としては、壺蓋、壺身、趨と高壺がある。その他に刀子・刀の一部や釘などの金属製品が出土している。

須恵器（第22・23図）

壺蓋（1・2）

壺蓋に関しては、宝珠つまみを有しかえりの付くものとそうでないものがある。1は天井部が偏平で、口縁部はほぼ垂直に開き端部を丸くおさめる。天井部中央部にはヘラ切り痕が残る。胴部は僅かに沈線を巡らせた痕跡が残る。内面はナデ調整である。内面に赤色をおびた部分が見られるが焼成時のものと思われる。

2は、宝珠つまみを有し天井部がわずかに丸みをもつ。口縁部にはかえりがつき、端部は丸くおさまり口縁部よりわずかに突き出る。内面は回転ナデ調整を施す。外表面は砂混じりの自然釉がほぼ全面に付着している。そのため、調整方法は不明である。

壺身（3～5）

壺身に関しては、受部を有しないものばかりである。3は底部が偏平で胴部は直立して口縁部に至る。口縁端部は丸くおさまる。底部は回転ヘラ削り痕が残り、胴部は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整である。外表面の一部に自然釉がかかること。4は、3と同様の器形で調整方法も同じであるが3よりもひとまわり大きく器高も若干高い。外表面には自然釉がかかっている。5は3・4とは異なった様相をもつ。色調は橙色で一見して上師器と見間違う。底部は偏平であるが胴部へは丸みをもって立ち上がりそのまま直線的に口縁部に至る。口縁部はほんのわずかに外反し端部を丸くおさめる。3・4と比

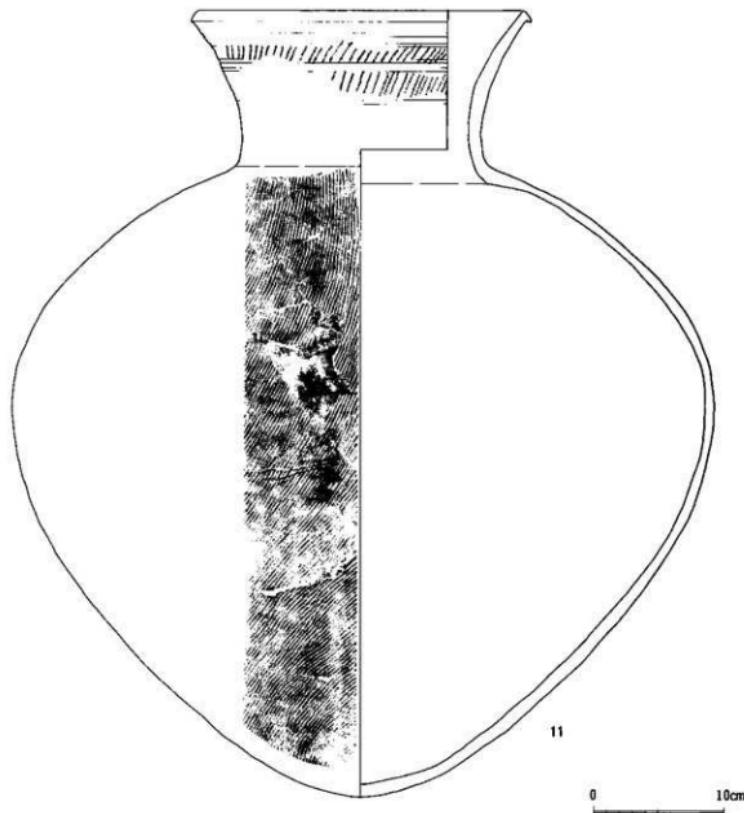


第22図 4号古墳出土遺物(1)須恵器

べ底部から胴部に至る部分が厚い。内面は回転ナデ調整、外面は回転ヘラ削り調整を施している。底部から胴部下半に網目状の圧痕が部分的に残るが何のものであるかは不明である。

高坏（6）

高坏は脚端部の破片と坏部が出土し基部から下は出土しなかったが図上で復元した。脚部は段を有し脚部は外周より約1cm内側までは平らでそこから立ち上がる。坏部の胴部は丸く立ち上がる。受部は強く斜上方に突き出し、口縁部は低くやや反気味に立ち上がる。外面は回転ヘラ削り調整後ナデ調整である。内面に焼成時のゆがみが見られる。



第23図 4号古墳出土遺物(2)須恵器

題(7)

題は1点のみ出土している。器高14.0cmでやや小ぶりだが端整なつくりである。底部に台が付く。胴部は丸く立ち上がり文様帶を境にはぼ直線的に頸部へ至る。頸部は上部で大きく開き綫を挟んで口縁部に至る。口縁部は開き気味に立ち上がり口端部に綫をもって丸くおさまる。口縁部直径が胴部直径をわずかながら上回る。胴部文様帶は櫛状施文具による刺突列によって構成される。文様帶の上下に1条ずつの沈線が施され文様帶を区画する。頸部上部も櫛状施文具によって装飾される。外面の調整方法はほとんどが回転ヘラ削りによるものであるが、胴部上半分は丁寧にナデ調整が行われている。注口部は斜め上向きに作られ下半分が胴部より盛り上がり膨らみをもつ形態のものである。内面は丁寧な回転ナデ調整が行われている。台の周縁には1条の沈線が巡る。台の裏面は緩やかに上底になる。台裏側までも丁寧に回転ナデ調整が行われている。

平瓶(8)

平瓶の口縁部の破片が2点出土している。同一固体と思われる。口径は推定で約5.4cmである。

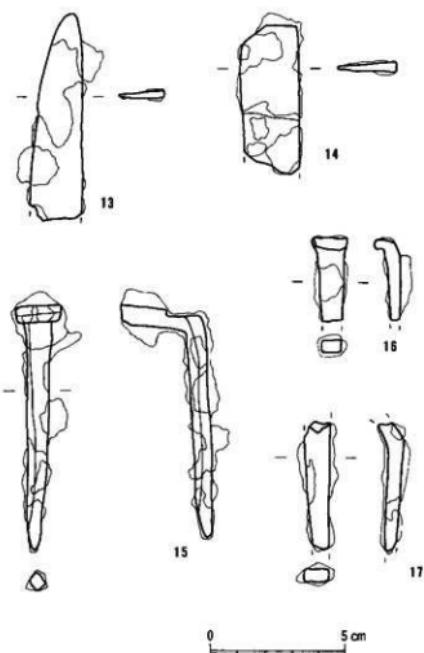
壺(9~11)

器高61cm、胴部直径54cmのかなり大型の壺である。胴部全面にタタキ調整が施される。頸部には櫛状施文具による文様帶が2列あり、沈線によって区画されている。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。口端部はさらに反って綫を形成し斜めに口縁部を形づくる。底部は丸く単独では据えることが不可能である。出土状況で先述したように墳丘掘でまとまって出土したことから何らかの墓前祭祀的意味を持つ道具と考えられる。ほとんどが小破片で検出されたことから意図的に割った可能性も考えられる。

鉄製品(第24図)

ほとんどが漢道へ崩落した上の中から山上した。15は墳丘全面裾部より出土している。

12は刀子の一部であり、13は刀の刃先の一部である。14~16は釘である。釘は断面長方形で、頭部が屈曲している。14は長さ9.0cm、15・16は大きく欠損している。



第24図 4号古墳出土遺物(3)鉄製品

第3表 4号古墳出土土器観察表

番号	器種	法量		胎土	焼成	色調	遺存	備考
		口径	底径					
1	須恵器 壺蓋	9.6	—	3.2	密	良好	にぶい黄色(2.5Y6/3)	1/5 天井部ヘラ削り 内外面とも回転ナデ
2	須恵器 壺蓋	10.0	—	3.0	密	良好	外)灰黄色(2.5Y7/2) 内)黄灰色(2.5Y5/1)	完形 内外面とも回転ナデ
3	須恵器 壺身	8.8	5.8	3.1	密	良好	灰色(7.5Y6/1)	ほぼ完形 内外面とも回転ナデ 底部ヘラ削り
4	須恵器 壺身	8.8	6.8	3.2	密	良好	灰色(5Y5/1)	2/3 内外面とも回転ナデ 底部ヘラ削り
5	須恵器 壺身	9.5	6.4	3.7	密	やや不良	外)にぶい橙色(5YR6/4) 内)にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	2/3 内外面とも回転ナデ 底部ヘラ削り
6	須恵器 高环	10.2	10.0	—	密	良好	灰色(5Y6/1)	脚部欠失 内外面とも回転ナデ
7	須恵器 壺蓋	10.4	6.6	14.0	密	良好	灰色(7.5Y5/1)	口縁部1/3 欠失 内外面とも回転ナデ
8	須恵器 平瓶	5.4	—	—	密	良好	オリーブ黒色(7.5Y3/1)	口縁部1/2 内外面とも回転ナデ
9	須恵器 甕	—	—	—	密	良好	灰オリーブ色(7.5Y4/2)	胴部片 タタキ調整 自然降灰
10	須恵器 甕	—	—	—	密	良好	灰オリーブ色(7.5Y4/2)	胴部片 タタキ調整 自然降灰
11	須恵器 甕	25.0	—	61.0	密	良好	灰黄色(2.5Y6/2)	3/4 タタキ調整

小結

本古墳は、3号古墳同様に背後の山の斜面を利用し地山を掘り込んで石室を構築している両袖式の横穴式石室を有する古墳である。3号古墳が山の斜面の中央部に位置するのに対し、本古墳は斜面の端の地形を利用して構築されていることが特徴である。また、前面に葺石を配していた様相が窺えることなどから前面に構築時の意識がはたらいていることを感じられる。さらに墳丘内部に方形の石組み（埋め殺しの外護列石）を有していることなどから当時の古墳構築の工程を窺い知ることができる。

出土遺物から見て、時期は7世紀中葉と考えられる。

第4節 6号古墳

調査概況

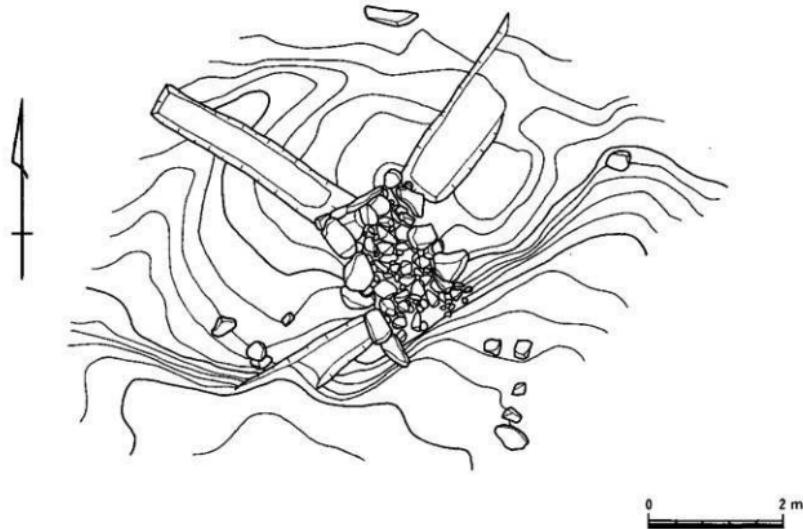
3号古墳の東側約8mの地点(10C~11D区のあたり)で、わずかにマウンドが見られ、長さ約60cmの石をはじめ大きめの石が点在していた。古墳の可能性が指摘されていた地点である。まず、東西方向と南北方向にトレンチを入れたところ、容易に墳丘と石室を確認することができた。東側は、重機等の通り道となっており、大きく壊されていた。天井石はまったく残っていなかった。石室内の埋土を除去して行く段階で、銭貨が2点出土した。腐食が激しく詳細は判明できなかった¹⁾。横穴式石室は、玄室の一部が残っており、墳丘もほぼ半分の範囲しか遺存していなかった。遺物は、石室内からは、耳環が2点出土したが、他の須恵器は、遺存する石室の東方に散在していた。

墳丘

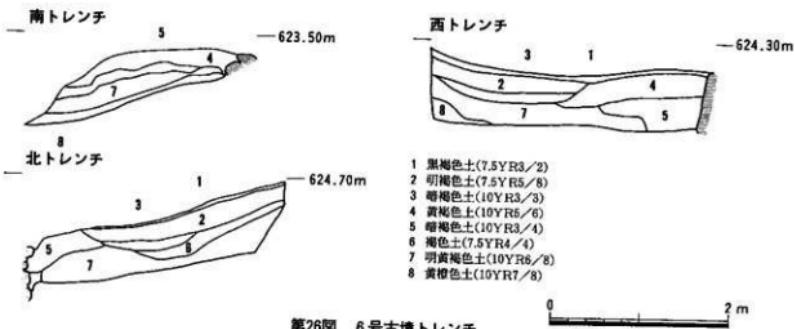
大きく削平されていたため、全容は明らかでないが、周溝部から見て、径が7m程の円墳と予想される。高さは、現状では約1.0mであるが、奥壁の石の頂部がすでに表土ぎりぎりの位置にあり、全容は不明である。

葺石、外護列石等の外部施設は検出されなかった。

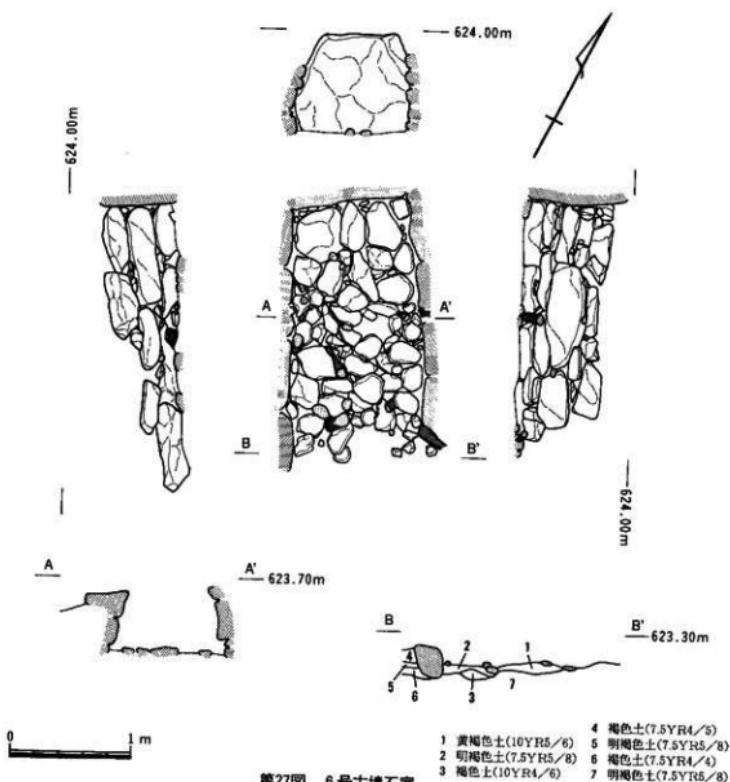
北西部が高くなる地形を利用しており、背後は掘り込んでいわゆる周溝を形成し、盛土している。



第25図 6号古墳平面図



第26図 6号古墳トレンチ



第27図 6号古墳石室

内部主体

天井石はなかったが、壁石等の状況から見て、横穴式石室と判断される石室を検出した。前方が大きく削り取られていたため、両袖式か片袖式かなどは不明である。

石室は直線的に構築されており、長方形を示す。主軸は、N-27°-Wである。大きさは、現状で、長さ約2.2m、幅は、中央部がやや大きめで、0.9~1.1mを測る。高さは、奥壁が80cmで、西壁は最大で60cm、東壁は同じく70cmである。石室の構築は前述の2基の古墳と同様である。横長の石を横積みあるいは小口積みで積み上げ、日地は1~2段ごとに通っている。裏込めの石はない。

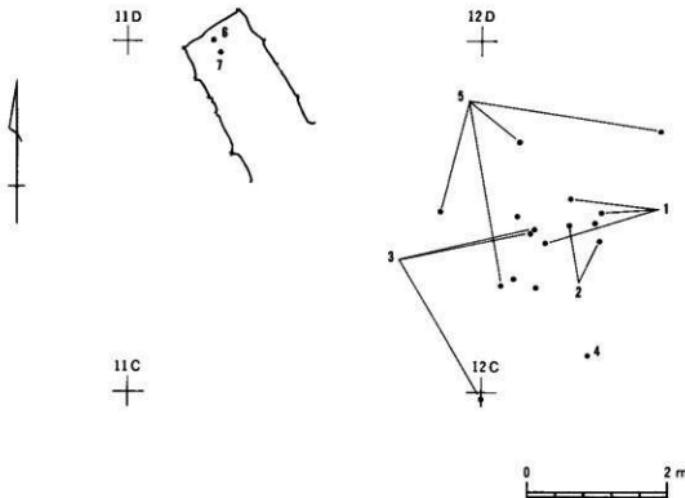
床は、10~50cm大の偏平な石が敷いてあり、4号古墳と異なり一部の空白はあるものの玄室全面に確認された。

遺物出土状況

石室内からは、奥壁近くの敷石の隙間から耳環が2点出土した。埋上からは銅鏡も出土している。銅鏡は腐食が激しく判読不能で時期不明である。石室が確認された地点の東側約3m程の地点で須恵器片が散在する地点があった。墳丘の推定範囲内にあるので、破壊された時点での遺物の所在を示すものであろう。

遺物（第29・30図）

須恵器類は、図示し得たもので、壺蓋3点、壺身2点、長頸壺の胴部1点である。耳環は2点出土している。



第28図 6号古墳遺物出土状況

須恵器（第29図）

环蓋（1・2）

1は、天井部は偏平ながらも丸みを有し、稜部は上・下を凹線状にくぼませてわずかに際立たせている。口縁部はやや開き気味で、端部を丸くおさめている。天井部外面は、3分の2まで回転ヘラケズリ調整を行っている。猿投窓の東山44号期のものであろう。

2は、天井部は偏平で直線的に口縁部に至る。口縁部は天井部との境に明瞭な境界がなく、端部は丸くおさめる。天井部中央に回転ヘラ切り痕が残る。

1と2の間には時期差が認められる。

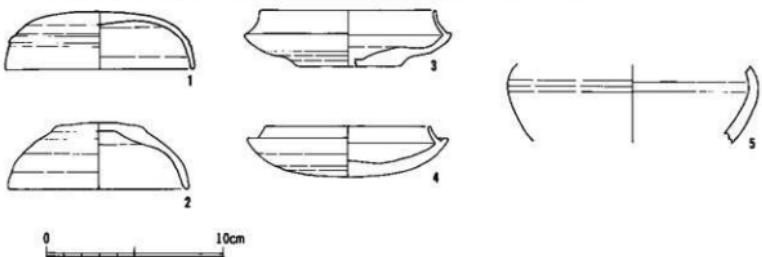
环身（3・4）

3は、底部は偏平で屈曲しながら受部に至る。受部はわずかに突き出している。口縁部は内傾しながら外反し、端部は丸くおさめる。底部外面中央に回転ヘラ切り痕がわずかに残る。

4は、底部は全体になだらかな丸みを呈し、受部に丸みをもって至る。受部はわずかに斜め上方に突き出す。口縁部は内傾して立ち上がる。底部外面にわずかに回転ヘラ切り痕を残す。

長頸壺（5）

5は長頸壺の胴部と思われる部分である。内外面とも回転ナデ調整である。



第29図 6号古墳出土の遺物(1)須恵器

耳環（第30図）

6・7ともに銅芯に金張りを施してある。ただし8は腐食が激しく残存状況は非常に悪い。断面はともに円形である。大きさは、7は外径2.3cm、内径1.6cm、太さ0.5cmであり、8は外径2.3cm、内径1.5cm、太さ0.5cmである。



第30図 6号古墳出土遺物(2)耳環

第4表 6号古墳出土土器観察表

番号	器種	法量		胎土	焼成	色調	遺存	備考
		口径	底径					
1	須恵器 坏蓋	10.6	—	3.2	密	良好 外)黄褐色(2.5Y5/3) 内)にぶい黄橙色(10YR6/3)	1/2	天井部1/3回転ヘラ削り 内外面とも回転ナデ
2	須恵器 坏蓋	10.2	—	3.7	密	良好 灰白色(5Y7/2)	1/3	天井部1/3回転ヘラ削り 内外面とも回転ナデ
3	須恵器 坏蓋	9.9	—	—	密	良好 浅黄色(2.5Y7/3)	1/5天井 部欠失	内外面とも回転ナデ
4	須恵器 坏身	10.0	5.9	3.1	密	良好 灰オリーブ色(5Y6/2)	1/4	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ削り
5	須恵器 坏身	9.4	—	2.8	密	良好 外)浅黄色(2.5Y7/3) 内)にぶい黄色(2.5Y6/4)	ほぼ完形	内外面とも回転ナデ
6	須恵器 長頸壺	—	—	—	密	良好 灰色(N6/)	胴部	内外面とも回転ナデ

小結

新発見の本古墳は、墳丘が大きく崩壊しているが、推定で径約7mの円墳である。石室の全容は不明であるが、敷石のある小規模の横穴式石室を有する。敷石は、石室全面に偏平な石が敷きつめてあるという点で、3号古墳・4号古墳の敷石と大きく異なり、飛騨地方でも初見の例となる。出土遺物はやや古いものも含むが、7世紀中葉が主体であり、構築時期もほぼ同時期と推定する。

1) 玉田忠雄氏のご教示を受けた。

第5節 古墳時代以外の遺物

古墳時代以外の遺物としては、縄文土器片、灰軸陶器片、石器類が出土している。

縄文土器（第31図1～8）

3号古墳および4号古墳の前面すなわち南側の平坦地から出土した。いずれも磨耗が激しく、原位置を留めていない。1は早期の押型文土器で山形文が横位に施されている。器厚5mm、色調はにぶい黄橙色を呈する。2～4は、器厚4mmと薄手で、貼り付けた隆帯に連続爪形文が施され、隆帯以外にも、幅10mm程の爪形文が連続的に施される。前期の土器で、北白川下層IIc式に相当しよう。5は沈線が2本横走し、6には縄文が施されており、7・8は無文の上器である。

石器類（第31図10・11）

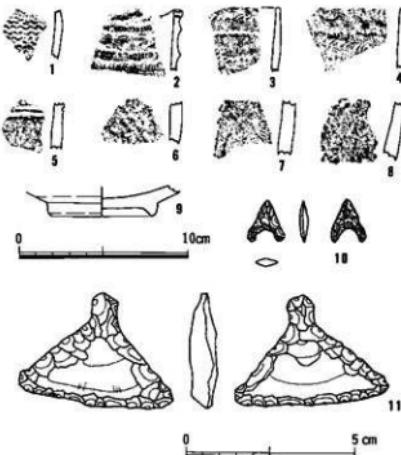
石鎌1点、石匙1点、剥片1点の計3点が出土している。10はチャート製の石鎌である。

基部の抉りは丸くて比較的深い。11は、凝灰

岩製の石匙で、3号古墳西トレンチの埴丘盛上部分から出土している。縄文前期に特徴的な三角形状を呈する横型のものである。剥片はチャートである。

灰軸陶器（第31図9）

1点底部のみを確認した。付高台の外側は付根部分から高台の上半を外傾し、下半は内傾して、やや屈曲している。美濃窯では光ヶ丘1号窯式から大原2号窯式にかけてのものに相当するであろう。与島古墳群の西方約300mの地点によしま古窯跡群があり、その関連性が予想される。



第31図 古墳時代以外の遺物

第4章 まとめ

与島古墳群の発掘調査の概要是、前章までで述べた通りである。本章では、与島古墳群の発掘調査の意義をまとめ、飛騨地方の横穴式石室に関して若干の考察をまとめたい。

第1節 与島古墳群について

飛騨地方の古墳の分布を見ると、古城郡古川町・国府町、高山市の盆地地域にほとんどが集中している。前方後円墳として知られるのは、古川町内では、信包八幡神社古墳、満添古墳があり、国府町内では、こう跡口古墳¹⁾、三日町大塚古墳²⁾がある。古墳の数について、分布調査の程度によりかなり差があり、実際の数字は把握できないが、国府町内の古墳の隆盛が指摘できる。

飛騨地方で発掘調査され報告されている古墳は、「冬頭王塚古墳」(高山市教委1971)と「赤保木5号古墳」(高山市教委1996)のいずれも高山市内の2例である。ただし、横穴に関しては、同じく高山市の杉ヶ洞横穴(斐太高校郷土研究クラブ1960)、桧山横穴(高山市教委1989)がある。吉城郡国府町の危坂古墳は、国府小学校建設時に壊され、当時の様子を伝える写真や遺物が残っている。同じく国府町の和田洞口古墳は、1987年に調査されたが詳細は明らかではない。高山市の西之一色1号墳は、善応寺遺跡の発掘調査の際に、清掃および実測作業がなされ報告されている(高山市教委1984・高山考古学研究会1984)。また、与島1号古墳は、1978年に高山考古学研究会の手によって石室の実測調査が行われた(高山考古学研究会1980a・b)。従って、飛騨地方での横穴式石室を有する古墳の発掘例を上げると今回の与島古墳群の発掘調査は厳密にいうと初めてとはいえないかもしれないが、実質的には最初の発掘調査報告例となる。

与島古墳群

与島古墳群は、第2章第2節でもふれたように、高山市の北西部、川上川左岸の古墳群の一部であり、從来5基の古墳からなる古墳群であった。発掘調査の結果2号古墳とされていたものは、古墳ではないことが判明し、新たに6号古墳の存在が明らかになったが、やはり、全部で5基の古墳からなる古墳群である。1号古墳から5号古墳は東西400mの範囲に点在するが、3号・4号・6号の3基は隣接している。

1号古墳は、前述のように1978年に測量調査の結果が報告されている。無袖式の横穴式石室を有する直徑約10mの円墳で、7世紀末の年代が当てられている。出土遺物実測図が示されているが、須恵器环身は受部があり、立ち上がりはやや内傾しながら直立するものもあり、年代はもう少し逆上ることができよう。墳丘に関しては草が覆っているが、裾部に外護列石の一部が見られる。

5号古墳は、ほとんど滅失しており、残念ながら全容は明らかにできない。奥壁が確認されており、他の古墳と同様の構造であったことが予想される程度である。

中央に位置する3基の古墳はほぼ同時期の構築とされる。3号古墳は他の2基と比べると規模が大きく中心的な存在であったと推定される。1号古墳が3基に先行するとするならば、東から西へ順に

構築された可能性もある。従って、5号古墳は不明であるが、3基の古墳にさらに遅れて構築されたものと推定することもできる。

第2節 飛騨地方の横穴式石室について

飛騨地方で横穴式石室を有する古墳は、開口していて知られているものがいくつかあるが、発掘調査された例はほとんどなく、その研究は遅れている。

県内の横穴式石室の研究に関しては、成瀬正勝氏が美濃地方を中心まとめたものがある（成瀬1985）。さらに、中井正幸氏が、岐阜県内の横穴式石室を集成し、各地域ごとにその編年案を示している（中井1992）。その中で、飛騨地区としては、一覧表に9基の古墳が記されている¹⁾。高山市内の古墳に関しては、第2章第2節で述べてあるように、横穴式石室を有する古墳についても、いくつか知られている。しかし、測量調査などがなされ資料化された古墳としては、発掘された本古墳群の3例とさらに上述の2例（与島1号古墳、西之一色1号墳）を追加することができる。

中井氏は、楣石や鶴居石の状況からの視点で分類し編年が試みられているが、今回の与島古墳群に関しては、残念ながら天井部の残存は悪く、その部分の検討は詳しくできない。構築年代は、いずれも出土した須恵器の状況から見て、7世紀代中葉におさまるものである。また、与島1号古墳は、今回調査された3基の古墳に先行するものと考えられる。従って、中井編年の「高山市城」では、7世紀代が空白になっているが、本古墳群の例はその空白を埋める資料となる。

飛騨地方の横穴式石室を実際に現地で観察すると、特に7世紀代のものに関しては、石室の実測図から見ても明らかであるが、玄門部に特徴が見られる。それは、平面形を見ると、玄室・羨道が直線的に作られ、玄門が中へ突き出しているという点である²⁾。本古墳群の3号古墳も、典型的なタイプのひとつといえる。つまり成瀬分類（成瀬1985）のⅢB c類が7世紀代に顕著に見られるという点である。また、玄門立柱石は、玄室側には斜めに両外に開き、羨道側は壁に対して垂直に直線的な石が利用されている場合がある。羨道部に偏平な石を閉塞石として利用したと想定することもできる。

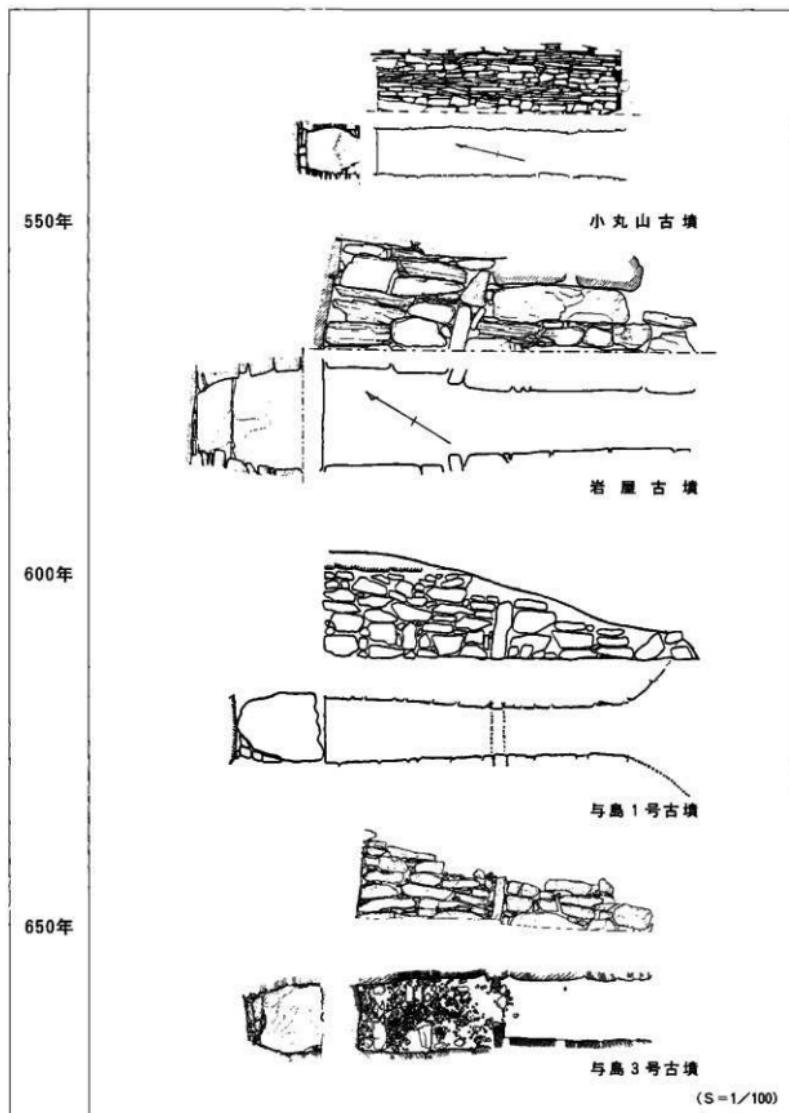
玄門部に注目して見ると、高山市の岩屋古墳は玄門が張り出してないタイプであり、別の系譜の石室であることが予想される。また、与島1号古墳は、無袖式のタイプであり、様相が異なる。そして、中井編年を参考にして、高山地域の横穴式石室の変遷を検討すると、6世紀代に堅穴系横口式石室といわれる小丸山古墳が古くに位置づけられ、その後に両袖式の岩屋古墳が続く。7世紀代に入り、無袖式の与島1号古墳があり、その後に与島3号古墳が来るであろう。

1) 前方後円墳ではないという考えもある。

2) 4世紀後半という築造年代が推定されている（国府町教育委員会）。

3) 信包八幡神社古墳、大洞平1号墳、大洞平2号墳、高野水上古墳、高野光泉寺古墳、こう咲口古墳、広瀬古墳、小丸山古墳、岩屋古墳の9基である。

4) 大洞平1号墳、高野水上古墳、高野光泉寺古墳など。



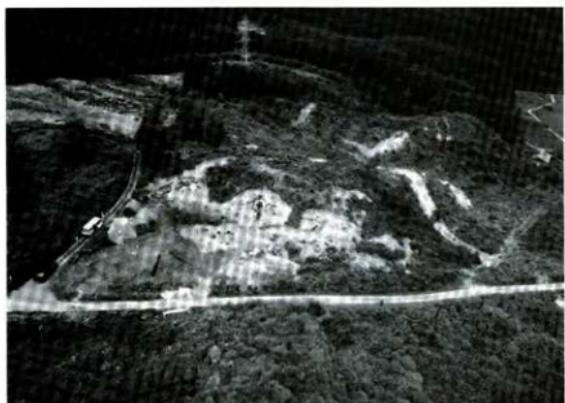
第32図 高山地域の横穴式石室の変遷

引用・参考文献

- 各務原市教育委員会 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
- 河合英夫 1989『岐阜県吉城郡古川町上町遺跡C地点発掘調査報告書』
- 岐阜県 1972『岐阜県史』通史編原始
- 岐阜県教育委員会 1962『岐阜県遺跡目録』
- 1990『改定版 岐阜県遺跡地図』
- 古代の土器研究会編 1992『古代の土器 I 都城の土器集成』
- 鈴木道之助 1981『図録石器の基礎知識III』
- 高山考古学研究会 1980a「よしま第一号古墳調査報告」「どっこいし」第8号
1980b「よしま第一号古墳調査」「飛騨春秋」25-11
1984「西之一色一号古墳の調査」「飛騨春秋」29-9
- 高山市教育委員会 1971『冬頭王塚発掘調査報告』
1984『善応寺遺跡』
1985『西之一色町岩屋古墳 三福寺小丸山古墳 調査報告書』
1989『桧山第1~3号横穴発掘調査報告書』
1995a『岐阜県高山市遺跡地図』(台帳編)(地図編)
1995b『高山の文化財』
1996『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 田口昭二 1982『猿投窯の灰釉陶器と緑釉陶器』『考古学ジャーナル』221
1983『美濃焼』
- 田中 彰 1993『現存する高山市内の古墳』『変陀』第3号
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址』I
- 東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会 1992『古代仏教東へ——寺と窯——』1.寺院編 2.窯編
- 中井正幸 1992『花岡山古墳群』
- 成瀬正勝 1985『横穴式石室の型式と変遷について——特に美濃地域の場合——』『岐阜史学』79
- 八賀 晋 1984『各地域における最後の前方後円墳 岐阜県』『古代学研究』105
1988『飛騨の古墳と古代寺院』『飛騨国府シンポジウム古代の飛騨』
- 斐太高等学校郷土研究クラブ 1960『杉ガ洞横穴調査概報』『有斐』第1号
- 斐太高等学校郷土研究部 1974『飛騨の古墳の研究』『有斐』第16号
- 飛騨国府シンポジウム実行委員会 1988『飛騨国府シンポジウム 古代の飛騨—その先進性を問う—』
1991『第2回飛騨国府シンポジウム飛騨と文化——豊かな生活の再現—』
- 藤本健三 1993『半田垣内遺跡』
- 渡辺博人 1996『美濃の後期古墳出土須恵器の様相——蓋坏の型式設定とその編年試案——』『美濃の考古学』創刊号



1



2



3

1. 発掘前の状況 2. 遺跡全景（空中写真） 3. 遺跡全景（南から）



1



2



3

1. 2号古墳発掘前の状況 2. 2号古墳南トレンチ 3. 2号古墳東トレンチ



1. 3号古墳発掘前の状況 2. 3号古墳全景（南から） 3. 3号古墳全景（西から）



1

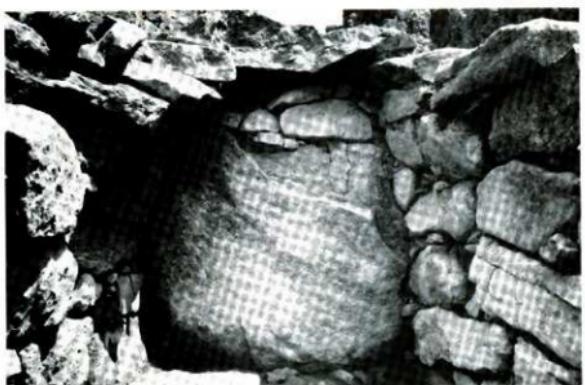


2



3

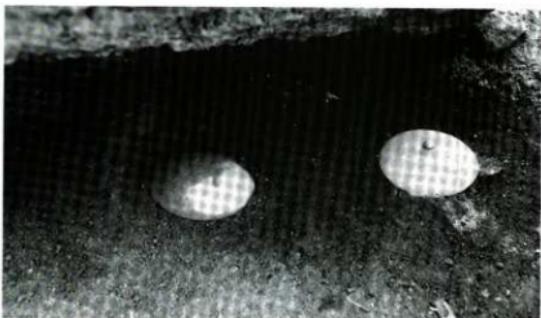
1. 3号古墳全景（空中写真） 2. 3号古墳外護列石（東側） 3. 3号古墳北トレンチ



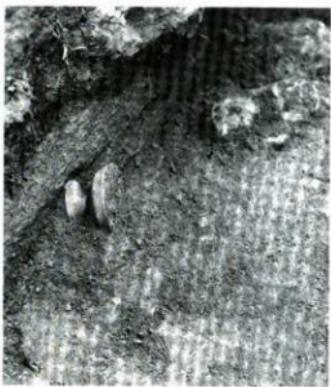
1. 3号古墳石室東壁 2. 3号古墳石室東壁 3. 3号古墳漢道西壁



1



2



3

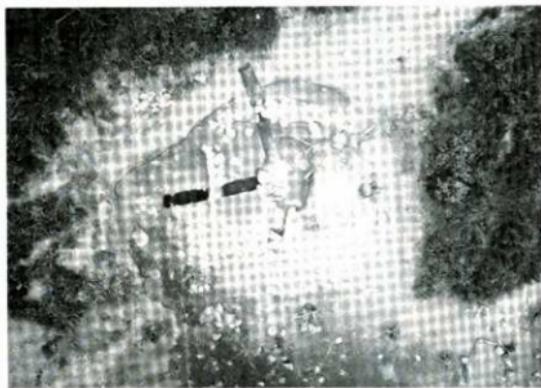


4

1. 3号古墳石室玄室 2・3. 3号古墳須恵器出土状況 4. 3号古墳土師器出土状況



1



2



3

1. 4号古墳発掘前の状況 2. 4号古墳全景（空中写真） 3. 4号古墳全景（南から）



1



2



3



4

1. 4号古墳石室西壁 2. 4号古墳石室玄室 3. 4号古墳外護列石（東側）
4. 4号古墳須恵器出土状況



1



2



3

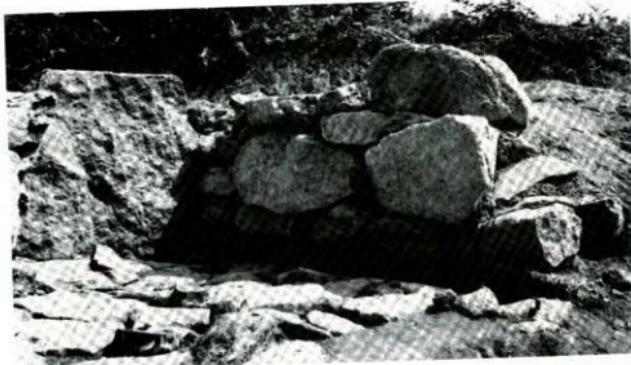
1. 6号古墳発掘前の状況 2. 6号古墳全景（空中写真） 3. 6号古墳全景（南から）



1



2

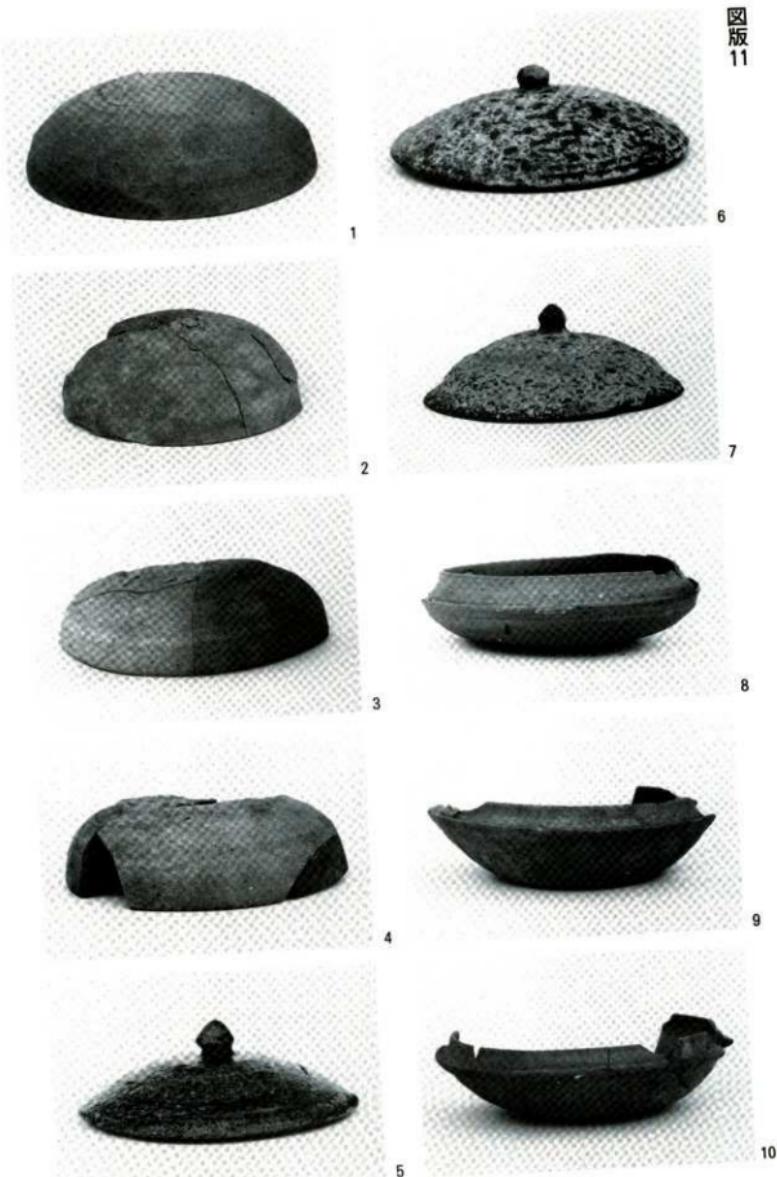


3



4

1. 6号古墳北トレンチ 2. 6号古墳石室 3. 6号古墳石室東壁 4. 6号古墳石室西壁



1~10. 3号古墳出土須恵器



1



6



2



3



7



4



8



5



9

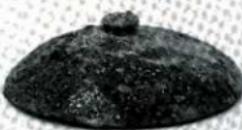
1~7. 3号古墳出土須恵器 8. 3号古墳出土土師器 9. 3号古墳出土耳環



1



6



2



7



3



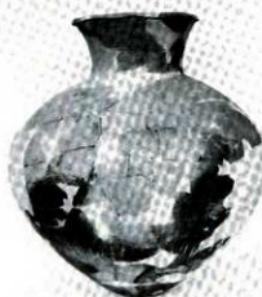
8



4

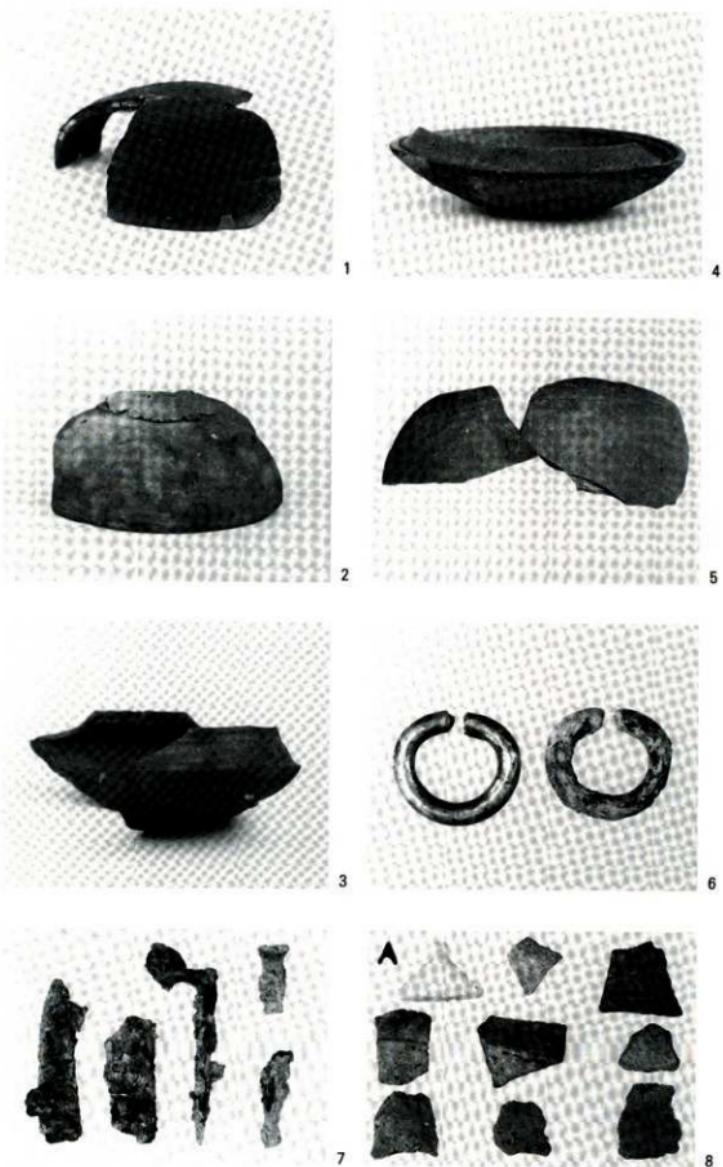


5



9

1~9. 4号古墳出土須恵器



1～5、6号古墳出土須恵器 6、6号古墳出土耳環 7、4号古墳出土鉄製品
8、古墳時代以外の遺物

報告書抄録

ふりがな	よしまこふんぐん						
書名	与島古墳群						
副書名							
巻次							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第33集						
編著者名	上鶴善治 伊藤秀雄						
編集機関	財団法人 岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒500 岐阜県岐阜市司町1 (岐阜総合庁舎内) TEL 058-264-1111(814)						
発行年月日	1997年3月27日						
所収遺跡名 ふりがな 所取遺跡名	所在地 ふりがな 所在	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
よしまこふんぐん 与島古墳群	ぎふけんたかやまし 岐阜県高山市 かみごりちょうよしま 上切町与島	21203	G11T00459 G11T00460 G11T08763	36°09' 54"	137°13' 42"	19970430～ 19970912 1,500m ²	飛騨東部第一 地区上切町地 農地造成に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
与島古墳群	古墳	古墳時代	円墳3基	3号古墳 須恵器(环蓋 ・环身・高环)、土 師器(环)、耳環 4号古墳 須恵器(环蓋 ・环身・高环・甕・ 平瓶)、鉄製品 6号古墳 須恵器(环蓋 ・环身)、耳環	3基とも横穴式石室 を有する円墳で、6号 古墳は新たに発見され た古墳である。いずれ も7世紀中葉のもので 3号・4号古墳は、両 袖式の横穴式石室を有 する。		

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第33集

与島古墳群

飛騨東部第一地区上切引地農地造成に伴う発掘調査報告書

1997年3月19日 印刷

1997年3月27日 刊行

編集・発行 財団法人岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）

印 刷 大 進 社 高山市有楽町40番地

『与島古墳群』正誤表

10頁36行目（下から2行目）	溝上古墳→溝上古墳群
37頁 第24図	13→12 14→13 15→14 16→15 17→16